

坂東三十三観音 巡礼記

南無観世音菩薩 同行二人



沙門亮盛輯「坂東霊場記」
の扉挿絵より

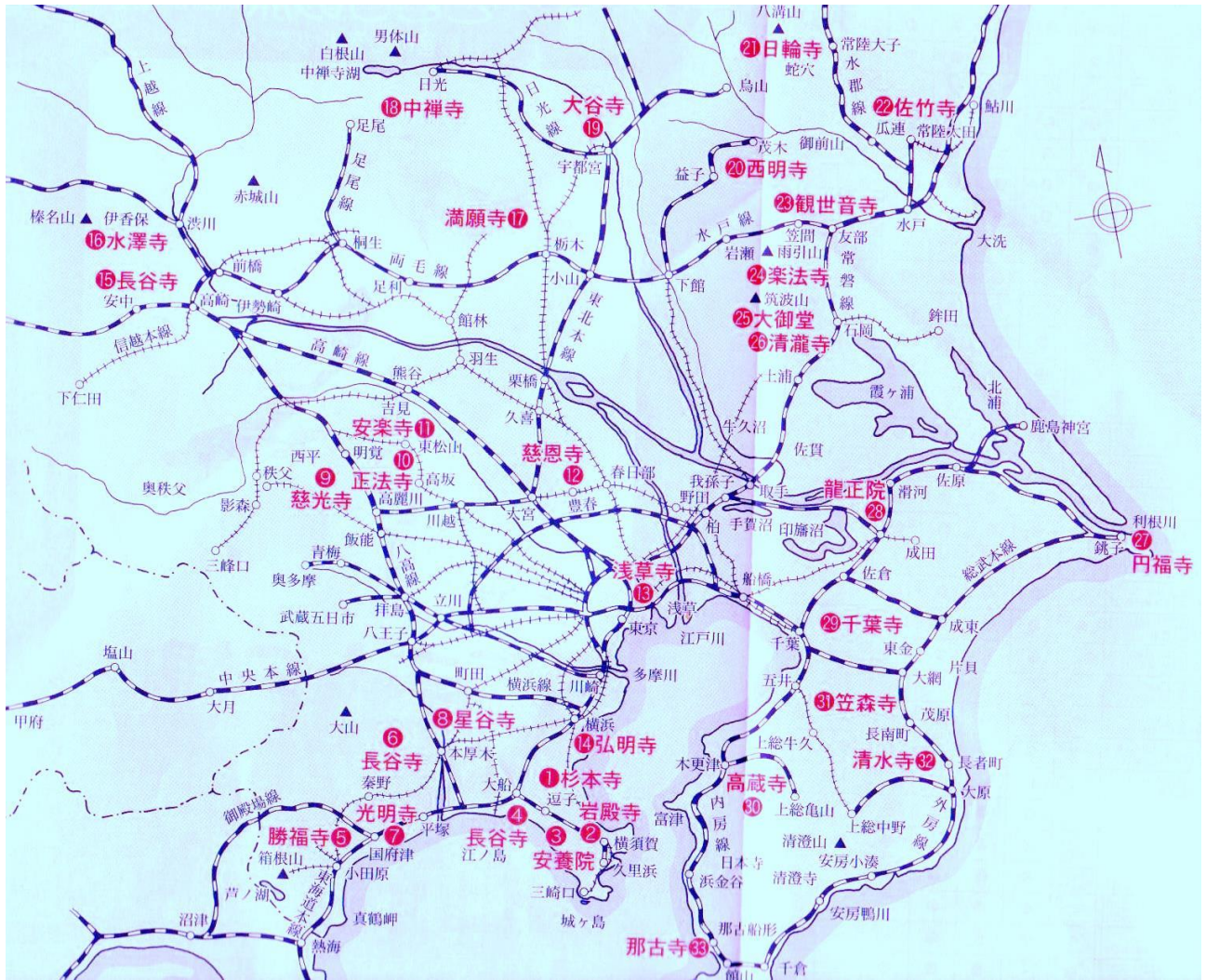
各札所の巡礼記はここをクリック [はじめに](#)



- | | | |
|---------------|---------------|--------------|
| 第1番 大蔵山 杉本寺、 | 第2番 海雲山 岩殿寺、 | 第3番 祇園山 安養院 |
| 第4番 海光山 長谷寺、 | 第5番 飯泉山 勝福寺、 | 第6番 飯上山 長谷寺 |
| 第7番 金目山 光明寺、 | 第8番 妙法山 星谷寺、 | 第9番 都幾山 慈光寺 |
| 第10番 巖殿山 正法寺、 | 第11番 岩殿山 安楽寺、 | 第12番 華林山 慈恩寺 |
| 第13番 金龍山 浅草寺、 | 第14番 瑞応山 弘明寺、 | 第15番 白岩山 長谷寺 |
| 第16番 五徳山 水澤寺、 | 第17番 岩流山 満願寺、 | 第18番 日光山 中禅寺 |
| 第19番 天開山 大谷寺、 | 第20番 独鈷山 西明寺、 | 第21番 八溝山 日輪寺 |
| 第22番 妙福山 佐竹寺、 | 第23番 佐白山 正福寺、 | 第24番 雨引山 樂法寺 |
| 第25番 筑波山 大御堂、 | 第26番 南明山 清瀧寺、 | 第27番 飯沼山 円福寺 |
| 第28番 滑河山 龍正院、 | 第29番 海上山 千葉寺、 | 第30番 平野山 高蔵寺 |
| 第31番 大悲山 笠森寺、 | 第32番 音羽山 清水寺、 | 第33番 禰陀洛山那古寺 |

[おわりに](#)

寓多羅亭鈍助 述之



※各札所の巡礼記の末尾に掲げた梵字は、札所本尊の種字である

寓多羅亭鈍助 述之

はじめに

2017 年 8 月に二度目の腰椎圧迫骨折を発症して動けなくなり、一日中寝て過ごさざるを得ない日々が 4 ケ月ばかり続いた。一日中何もできず、出来ることはベッドの上で惚けた頭でボンヤリと夢か^{うつ}現か、^{ゆめまぼろし}夢幻を夢想することだけだった。

そういう訳で、四国歩き遍路も昨年で 2 巡したのを機に、骨折が治ったら今後も更に四国アルキ遍路を続けること以外にも、新たに日本全国「百所観音詣り」でも始めようかと発心した次第である。「百所観音詣り」とは、「西国三十三観音詣」、「坂東三十三観音詣」、「秩父三十四観音詣」の観音寺院を合計百寺巡礼することであり、これと四国八十八カ所遍路が日本の古来からの 4 大巡礼と言われている。

チョット余談になるが、これらの巡礼の概要は以下のようにになっている。

	寺数	巡礼距離・日数	所在都道府県	開創年代？
四国八十八カ所遍路	8 8	1, 200km 50 日	四国 4 県	9 世紀頃
西国三十三観音巡礼	3 3	1, 000km 40 日	三重を除く近畿 6 府県、岐阜県	8 世紀頃
坂東三十三観音巡礼	3 3	1, 300km ?	関東 7 都県	1 2 世紀頃
秩父三十四観音巡礼	3 4	100km 数日	埼玉県（秩父市、秩父郡）	1 3 世紀頃

巡礼は、元来歩いて廻るのが基本であり、交通機関の無かった古代には馬や籠や輿が使えた皇族や貴族以外の巡礼は歩くしかなかった。「歩く」ということは心身に苦行を与えることであり、それゆえに修行の甲斐も御利益もあると信じられていたのである。「熊野御幸記」などによれば、皇族や貴族でも、熊野詣の途中にある馬や籠や輿が通れない峻しい山越えは、自分の足で歩いたと記録されている。

さて、余談はさておき、昔の遍路道が今でも保存・整備されている四国八十八カ所遍路を除き、上の三つの観音巡礼では、かつての巡礼古道は今では廃道・不明になってしまっている上に、殆どの霊場が輻輳した街中にあるために現代では歩いて巡っても何の面白味も無く、従がって、アルキ巡礼者は皆無となり、観光巡礼バスツアーや電車やバスや車で詣でるのが普通であるそうだ。それでも、西国三十三観音巡礼は山中の札所もあり、巡礼古道も少しは残っていて、札所のうちの一つのお寺（第 29 番「松尾寺」、舞鶴市）の住職が歩き巡礼を推奨しているので、年に何人かはアルキで廻っているらしい。

小生も一念発奮、四国遍路と並行して、上の「百所観音詣り」も行うことにした。「西国三十三観音」は来年(2018 年)の春にアルキ通し打ちで巡ることとし、また、「秩父三十四観音」は狭い範囲に札所が集中しているために歩いて廻ってもほんの数日で一気に廻れるので、そのうちアルキで巡ることにして、残る「坂東三十三観音」は折々の暇をみて自宅から公共交通機関で行きつ戻りつを繰り返しながら巡ることとした次第である。

恥ずかしながら小生は信仰心は皆無、従がって仏サマや神サマに功德を奉る^{ゆかり}縁も無いから、瑞兆も御利益も無い。ただただ諸国漫遊と般若湯を楽しみにトボトボと歩くだけである。

巡礼路にある宿や酒亭に幾許かの浄財は落とすので、マ、これが多少の功德にはなろうか。

2017 年 11 月吉日 寓多羅亭 鈍助

第一番 大蔵山 杉本寺（杉本観音） [神奈川県鎌倉市]

この夏の8月に腰椎骨折となって以来、外出したのは病院通いだけで、それ以外は始終家の中に蟄居、4ヶ月経ってやっと少しは歩けるようになったので、電車に乗る練習を兼ねて自宅から近場の鎌倉にある第1番を詣でてみた。自宅のある神奈川県には「坂東三十三観音札所」は9ヶ寺あり、そのうちの4ヶ寺が鎌倉にあるので、まずは鎌倉の第一番杉本観音に参ってみた。

「坂東三十三観音詣」に限らず、巡礼の順番（順路）はどこから始めてどこで終わってもよいし、つまみ食いを繋いで行っても構わないが、やはり発願寺（第一番札所）から巡り始めて、結願寺（第三十三番札所）で打ち終わるのが気持ち良いのではなかろうか。

杉本観音は、鎌倉ハイキングなどで門前を通ることは何回もあったが、お参りしたのはこれが初めてである。鎌倉で一番古く、かつ最も古い仏像がある寺だそうで、なるほど本堂は古びて小さいながら由緒ありそうな御堂で、屋根も茅葺であった。最近茅葺の職人も少なくなりまた茅材も高価なので葺き替えには莫大な費用が掛かり、加えて近年は温暖化の影響などで10年間くらいしかもたず、屋根葺き替えのために御参詣の皆様のご浄財をよろしく願いますとの札も建っていた。

山門から本堂までの石段は、すっかり踏み潰されて摩耗している石段に苔が覆っていて風情があった。苔の緑の上に紅葉の葉でも散り敷いていれば、これはまさに補堕落浄土の光景であろうが、前世の因縁よろしからず今生でも悪行の限りを尽くしてきた小生にはそのような験は、当然ながら顕れなかった。



（山門の仁王尊 運慶作）

（山門から本堂への石段）

本堂はほんに小さな観音堂であったが、堂内には古色蒼然として如何にもお蔭がありそうな古仏がびっしりと祀ってあった。たった200円の入山料で堂内に上がらせて頂いて、これらの仏様全てのご尊顔を至近から親しく拝せられるのは、その道の好事家には堪らない御利益であろう。

ご本尊は、恵心僧都、慈覚大師、行基菩薩作の十一面観音三尊の秘仏、加えて平安・鎌倉期の仏師運慶作の前立観音、脇立観音や不動明王、地藏菩薩などが所狭しと並んでいて、これらの諸仏に見据えられると、脛に傷持つ身には何か恐ろしいお裁きがあるような気がして落ち着かなかった。遍路や巡礼路には諸処に「関所寺」という関所があり、邪悪な心を持つ者はここで天罰が下って、病気や事故に遭い

そこから先には進めなくなるという仕掛けであるが、関所寺でのお裁きは広くて明るい境内のことでもあるし、脛に傷を持っていても特段のこともないが、狭くて暗い堂宇の中や胎内窟を巡っている時にはオソロシイ心持になるのは、やはり心に疾しいことがあるからであろうか。

さて、観世音菩薩は、衆生済度のために 33 種の観音様の姿に変身して現れると言われており、馬頭観音を除き十一面観音や千手観音など他の観音菩薩は柔和なお顔で、また女仏のお姿でも垂迹されるので、この杉本寺の十一面観音秘仏三体もさぞや優しいお姿であらせられると思われるが、秘仏であるので堂宇の一番奥のちょっと近寄れない薄暗い厨子の中におられたので、ご尊顔はしかとは拝見できなかった。マ、どちらにしろ、信仰心皆無の小生には仏像は拝むものではなく“芸術品の観賞”でしかないが、ゲイジツ心はあれど芸術心皆無の凡夫にはどこかの博物館の展示品見学でしかない。



(杉本観音 本堂(観音堂))

本堂の小ささに相応しく、納経所も小さいものが本堂の入口にしつらえてあった。ここで坂東三十三カ所用の納経帳、白衣、輪袈裟を買った。白衣も輪袈裟も、観音霊場巡礼用と四国遍路用は書いてあるご名号が異なるので、別々に買わなければならない。前者には「南無観世音菩薩」、後者には「南無大師遍照金剛」のご名号が入っているのだ。

金剛杖も同様であるが、金剛杖は街中では長くて邪魔になるので四国遍路では突かなかったが、やはり礼儀作法どおりにした方がよろしいので、登山で使っている伸縮ストックで代用することにして、上のご名号をストックに刷り込んだ。特に坂東三十三所巡礼は道中は乗り物だから長尺の金剛杖は車内に持ち込みにくい。

余っているもう一本のストックも四国遍路用に代用することにして、弘法大師のご名号「南無大師遍照金剛」を刷り込んで作った。菅笠は四国遍路も観音巡礼も同じである。

【大蔵山杉本寺】天台宗 本尊：十一面観世音菩薩（三尊）

【御詠歌】たのみあるしるべなりけり 杉本のちかいは

すえの世にもかわらじ (参詣日：2017/11/29)



(右：観音巡礼用、左：四国遍路用)

第二番 海雲山 ^{がんでんじ} 岩殿寺 (岩殿観音) [神奈川県逗子市]

この寺は辿り着くのに道が非常に分かりにくい。第一番札所で貰った鎌倉4観音巡礼地図では、鎌倉駅から逗子駅行のバスで逗子駅の少し手前、名越切通の先で降りてスグのように書いてあるが、これがまた横須賀線の線路際や古い住宅街の中をウネウネと抜ける道で、案内板なども全く無いから、よそ者にはどうにも辿り着けない。今回は幸いに、ご自宅の前を掃除していたオジサンに道を聞いたところ、毎日の日課の散歩を兼ねて寺まで同道案内して頂けたので大助かりであった。マ、これも観音様が下された御利益であろう。

鎌倉の街中の諸寺が大繁盛しているのに比べて、逗子の山中にあるこの山寺はひっそりと静まり返っていて詣でている人は誰も居なかった。本堂にも人影は全く無く、納経のための呼び鈴がついていた。しかし、広い境内や堂宇にはきちんと手が入っていて、寺の収入も所謂観光寺収入ではなく、ちゃんとした信心深い檀家の浄財で賄われているのであろう。

山門から山頂近くの観音堂までは長い急な石段が二百段程あって息が切れたが、振り返ると逗子の海が初冬の陽光を受けて輝いていた。観音堂の裏山には、開山の一人行基菩薩が岩に刻んだという十一面観音菩薩が祀られている奥之院（この寺の寺号の由来となった岩殿）があったが、岩屋はセンスの無いセメントの壁で囲まれていてそのような由緒ある風情はなかった。



(岩殿寺 観音堂)



(奥之院 岩殿観音)

寺伝によると、開基は奈良時代の徳道上人と行基菩薩で、また平安時代には花山法皇や後白河法皇も御幸されたという。その頃、京の都から遙か離れた東国のこの鄙の地に法皇が行幸したとも思えないが、花山法皇は坂東三十三霊場巡礼の基^{もと}となった西国三十三霊場巡礼の中興の祖と言われており、また、後白河法皇も西国三十三霊場巡礼の原型となった熊野詣を33回も行ったという伝承から、その威を借りて坂東三十三霊場やその寺の格付けアップに資したというのが実態であろう。また、徳道上人というのは西国三十三観音詣の創始者と言われている名僧であるが、同じくその名を騙られただけであろう。

このような寺伝を伝えている坂東三十三札所の寺はここ以外にも多いが、それらは全て同様な縁起と思われる。事実、坂東三十三札所霊場会という公式な組織も以上のようなことを認めていて、その旨HPにも記載している。

(序に言えば、西国三十三霊場巡礼の「徳道上人・創始」説や、「花山法皇・中興の祖」説自体も、何れも後世の牽強附会であり、西国三十三霊場巡礼はその時代よりも前からあった土着宗教の“遊行”修行から発生したものであるというのが今日の定説である)

さて、昔は、坂東巡礼第一番の杉本寺からこの二番の岩殿寺まで衣張山を越えて山伝いに巡礼古道があったそうだが、今は宅地開発などで跡形もなく、僅かにこの岩殿の裏山に当時を偲ばせる巡礼古道の石碑が立っているだけだそうだが、腰椎骨折中の身体では登って確かめて見ることはできなかった。



【海雲山岩殿寺】曹洞宗 本尊：十一面観世音菩薩

【御詠歌】たちよりて 天の岩戸を おし開き 仏をたのむ 身こそたのしき

(参詣日：2017/12/11)



鎌倉の安養院といえば、紫陽花の明月院、水仙の瑞泉寺と並んで、躑躅の寺として鎌倉花歩きの観光客には大変人気のあるお寺である。また、鎌倉の中心街からも近いので、躑躅が満開になる五月には、若宮大路から名越切通へ通じるこの寺の前の道路は躑躅見物の御婦人連で溢れ返って大交通渋滞になる。

さて、往古では坂東観音巡り第一番の杉本観音から衣張山の山伝いに第二番・岩殿観音に詣り、そこから名越切通を越えてこの第三番・田代観音を打った後、若宮大路から第四番・長谷観音に詣でて鎌倉の4観音を一巡するというのが習わしであった。

今は衣張山の麓には大きな道路が通っているし、昔は険阻であった名越切通も大きなトンネルで抜けられるが、往時はこの辺りの山は鎌倉と外界を隔てる要塞の境界であり、また罪人を斬り捨てたり、死者を捨てたり、怨霊が現れたりする異界の場所でもあったから、観音巡りも楽ではなかったであろう。



（躑躅満開の安養院門前。他人の HP から無断借用）

さて小生がこの寺に行ったのは初冬であったから、お寺はひっそりとしていて毎日参っているという近くのオバサンが一人参詣していただけてあった。納経所も閑散としたもので「御用の方はこの呼び鈴を」の張り紙があり、お坊さんも納経のリクエストがあった時だけ庫裏から出てくるらしい。

本堂の裏に廻ると、二基の宝篋印塔が建っていた。案内板によれば、右側の大きな方は鎌倉で一番古い宝篋印塔だそうで、この寺の前身の善導寺の開基尊観上人の墓、左の小さい方は北条政子の墓であるという（説明板は次ページに拡大）。

北条政子は夫頼朝の菩提を弔うために鎌倉に3ヶ寺を作ったそうだが、この寺もその一つで、寺の院号は政子の「安養院殿如実妙観大禅定尼」によるという。



（山門前から境内中、躑躅がびっしりと植えられている）



（2基の宝篋印塔。右が鎌倉最古のもの、左が北条政子のもの）

この宝篋印塔の横にはユーモラスな寝姿のお地蔵様が奉られていた。お地蔵様は地蔵菩薩ではありながら、冠や首飾りや後背で飾られた他の菩薩とは異なり、簡単な袈裟を着ただけの僧形の子供姿である。お顔も優しくて安らかである。地蔵菩薩は庶民の苦しみを救う仏であるので、それだけに衆生の信心が篤く、村境などの路傍にも赤い涎掛けを寄進されて祀られている。

この寺のお地蔵さんは身代わり地蔵で、参詣者に撫でられてツルツルになっていた。身代わり地蔵というのは、衆生の災難や災難に遭って苦しんでいる人の苦しみを身代わりになって引き受けて下さる有り難い菩薩である。赤い涎掛けは、子供に着せる涎掛けと同じで、赤色は清く正しい心の象徴であるそうで、干支が一巡した還暦に赤いチャンチャンコや袖なしを贈る風習も、生まれ変わったこれから先も清く正しく生きて貰えるようにという同じ由緒からであるらしい。

話は飛ぶが、最近では白衣・輪袈裟・金剛杖・菅笠セットの巡礼姿で参詣する人は殆どいないのか、納経を終わって山門で合掌礼拝した巡礼姿の小生に、若い住職がいつまでも深々と頭を下げて合掌されていた。

お坊さんに拝まれるということは、何か自分が有り難い仏様になったような気分がして良い心持になったが、何の信仰心も無く酒池肉林だけを楽しみにこのような観音詣や四国遍路を廻っているワタクシ奴はキット地獄に墜ちるに違いないと心配になってきて、何やら気持ち悪くなってきた。

マ、この寺の身代わり地蔵サマを再拝して般若湯でも奉り、血の池、針の山から救い上げて貰うことにしよう。

【祇園山 安養院 田代寺】 浄土宗 本尊：千手観世音菩薩

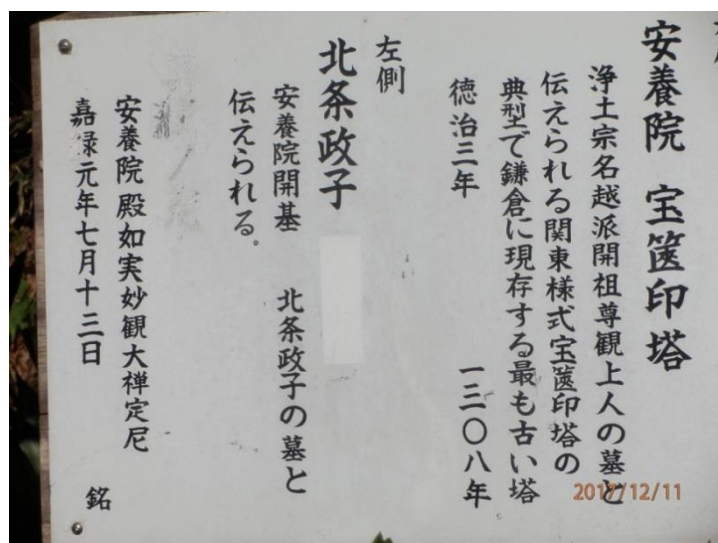
【御詠歌】 枯樹にも 花咲く誓ひ 田代寺 世を信綱の 跡ぞ久しき



(ユーモラスな寝姿の身代わり地蔵)



(宝篋印塔の説明版⇒)



(参詣日：2017/12/11)

第四番 海光山慈照院長谷寺（鎌倉長谷観音） [神奈川県鎌倉市]

鎌倉の坂東三十三観音札所には上述の三札所に加えてこの鎌倉長谷観音の四札所があるが、今までの三寺に比べて、この長谷観音はちょっと寺相が異なる大寺・大伽藍であり、鎌倉随一の観光寺でもある。ここには今まで何回か来たが、いつも海外からの客人を鎌倉に案内した折に観光で立ち寄ったり、鎌倉八幡宮に初詣に行った際にちょっと寄り道しただけで、信仰心はまるで無かった（今も同様であるが）。

今回は坂東三十三観音札所巡りと初詣を兼ねて正月に行ってみた。正月のせいでもあろうか、賑やかな初詣客や鎌倉七福神巡りの袋をブラ下げた参拝者が多く、やはり観光寺の面目躍如であった。境内には四季折々の花樹が庭師の手で整然と整えられており、また寺が鎌倉西端の高台にあって相模湾の陽光と波映を足下に見渡すことができるので、寺では「鎌倉の西方極楽浄土」と呼んで集客に余念が無いようだ。なるほど、正月早々から臘梅やボケやナントカ桜が満開であった。



（左：観音堂、右：如来堂）

（広大な境内は西方極楽浄土への道か？、或いは単にピクニックランドであるか？）



観音巡礼には大別すれば2種類あるそうで、一つは現生での御利益を求めるもの、もう一つは現生はマアマで過ごせたので引き続き来世での後生の安穩を祈願することの二つであるらしい。病苦の平癒や災難除け、商売繁盛祈願などは前者であろうし、功成り名遂げた人が一転発心して巡礼の旅に出るのは後者の方であろう。観音巡礼ではあまり聞かないが、四国遍路などでは藁にもすがりたい程の病苦や

不幸に苛まれていた人びと、例えばレブラ患者が崩れた顔をカッタイ布で覆い、足萎の人がイザリ車に乗って巡礼していたような人びとには申し訳ないけれども、上記の二つの御利益に加えて、寺域の美しい花園や山海の絶景に触れることによって一時的にも苦しみを忘れまた精神の興作にも繋がるならば、これもまた観世音菩薩の大慈大悲であろうし、単に花の芳香を嗅いで涼しい海からの風と潮騒でも受けて気持ち良くなるだけでも御利益というものであろうから、信仰心云々などの屁理屈を持ち出すまでもなく、この世の中の至る所に仏様が居られるというふうに考えれば、信仰心無き小生も救われるのである。

小生は信仰心が無いので神や仏の御手の内には住ませて貰えないが、そもそも信心というものは、気持ちのよい自然や山海の絶景・奇景、その中で生きている万物の生き様に触れる時に、心の内に何か感得するものがあって「草木国土悉皆成仏」の世界に観照することではなかろうか。これは、釈迦でもキリストでもマホメットでも衆愚でも同様であって、その本来の姿はアニミズムや土着宗教や修験であろう。〇〇教や△△宗と称する宗教は、このようなプリミティブな心象を仏法という胡散臭い衣に包んで商売道具にしていると言え、あの世では油地獄に落とされること必至であろうナ。

さて、話が横道に逸れたが、ここ鎌倉長谷寺の“西方極楽浄土ピクニックランド”の主堂である観音堂は四層建の大堂宇で、祀られている観音様は像高三丈三尺（約9m）の十一面観世音菩薩で、本邦最大の木彫仏であるそうナ。寺伝によれば、大和の長谷寺で樟の巨大な霊木から刻み出された観音像二体の内、有縁の地での衆生再度の誓願が込められて海中に奉じられた一体が遥々横須賀に流れ着き、鎌倉へ遷座されてこの鎌倉長谷寺が開基されたというが、マ、これも例によって後世の作り話であろう。

因みに十一面観世音菩薩を本尊として「長谷寺」を名乗る寺はこの鎌倉長谷寺をはじめ全国に240寺もあるそうナ。坂東三十三札所にも、鎌倉以外にも第六番札所「飯上山 長谷寺（飯山観音）」（神奈川県厚木市）、第十五番札所「白岩山長谷寺（白岩観音）」（群馬県太田市）がある。

この三丈三尺の観音様を安置するために建てられた鎌倉長谷寺の観音堂も大堂宇であるが、祀られている観音菩薩も堂々としたもので、下から見上げる首が痛かった。一般の観音菩薩は蓮華の上に立っているが、長谷寺ファミリーの十一面観世音菩薩は岩座（金剛宝盤石というらしい）の上に立っている独特の尊容で長谷寺式と呼ばれているそうナ。また、ここ鎌倉長谷の観音様は水瓶を持った左手の小指が開いているのが特徴だそうナ。何か特別な意味があるのであろう。

左：鎌倉長谷寺
十一面観世音菩薩
（本尊）
右：同 御前立

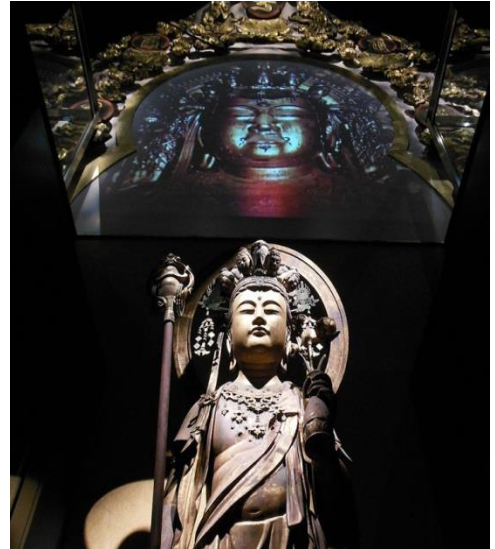
水瓶を持つ左手の小指が、御前立（右像）は閉じられており、本尊（左像）は開いていることに注意。



観音堂の隣には「観音ミュージアム」というギャラリーが開設されていて、通常の拝観路からは見えない御本尊のデジタル映像が写されていたり、観音菩薩が衆生を救うために 33 種の姿に変化して顕れるという観音三十三応現身像や珍しい懸仏などが展示されていて、特に御前立の上に流されている御本尊の映像や、恰も三十三応現身像に囲まれたような展示方法はちょっと普通のお寺ではお目に掛かれない仕掛けで、神秘的な幻想を醸し出している。応現身像が 33 種全て揃っているのはここだけだそうだ。



(三十三応現身像、チョット神秘的な雰囲気)



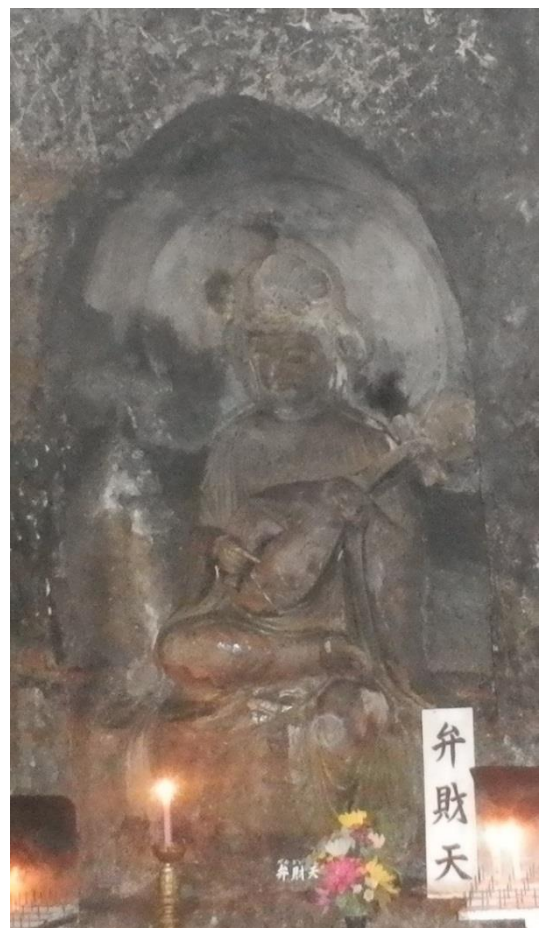
(前立観音像の上に御本尊のデジタル映像が幻想的に流れる)



(懸仏)

境内には弁天窟という岩屋があり、岩壁には弁財天とその眷属である十六童子が刻まれていた。琵琶を抱えている弁天様はふくよかで艶めかしかった。

また、境内には和み地藏が祀られていて、そのユーモラスな姿は微笑ましかった。



また、正月元旦には修正会・万灯祈願なる光りのページェントも行われるそうで、これも初詣の集客の仕掛けではあろうが、一見の価値はあろう。



(和み地藏)



(元旦の修正会・万灯祈願)

深山幽谷の古刹や草深い田舎寺に比べて、この鎌倉長谷寺は信仰の情緒や心象には些か欠けるかもしれないが、相模湾に向かって明るく開けた境内や伽藍の結構は人の心を楽しませ和ませるという御利益もあろうから、観光スポットとしての客寄せの功罪はともかくとして、それなりに楽しめる寺であろう。

ただ、各堂宇の前に置かれた灯明台や線香台には、寺のマークが入った有料の蠟燭(1本 200円)や線香(1本 100円)が並んでいて、家から持ってきた貧者の一灯を灯せる余地は無かった。献灯や献香は、参詣者各自がその心とともに持参して供えるものであって、偶々持参した蠟燭が無くなった時にその場でも求められるように寺が僅かな喜捨で準備してくれているのが普通であって、この寺のように寺が用意した物を使うように半ば“強制”しているのは如何なものであろうか。蠟燭や線香の喜捨の額も一般の寺の10倍である。

大寺では寺の修理や境内の整備に膨大な金が掛かることは頷けるが、それらの経費は浄財や拝観料で賄われるべきものであって、喜捨を強制するようなやり方は観世音菩薩も喜ばれないのではなかろうか。

悪口のついでに言えば、御詠歌も観光地の安っぽい客引きキャッチフレーズにも及ばず、西方極楽浄土や南無観世音菩薩の感懷も感じられない。

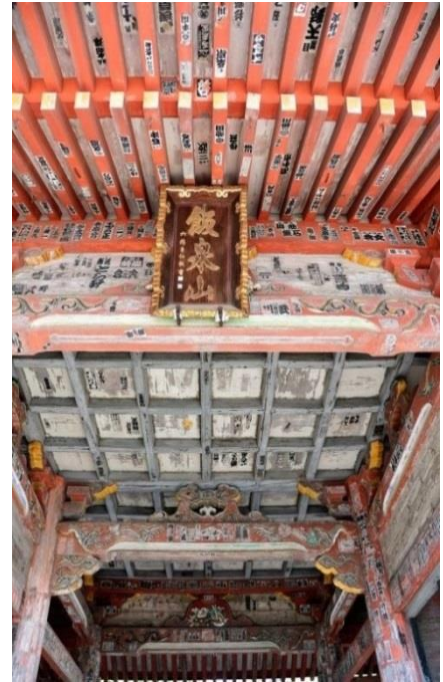
【海光山慈照院長谷寺】単立(浄土宗) 本尊：十一面観世音菩薩

【御詠歌】長谷寺へまいりて沖をながむれば 由比のみぎはに立つは白波



(参詣日：2018/1/4)

※観音堂・如来堂の参詣写真、弁天窟の弁天像、及び和み地藏以外の仏像の写真と万灯祈願、境内の鳥瞰マップは同寺のHPから引用した。



（立派な仁王門の結構と扁額）

この寺は小田原市街から北へバスで15分の酒匂川畔にあった。一帯はかつては田園地帯であったようで、酒匂川の対岸から西には足柄平野とそれに続く足柄の山々、更に稜線の上には真っ白な富士山が見えた。近郊の町中の寺院にしては境内が広く、八脚門の仁王門も立派なものであった。八脚門としては神奈川県内でも最大級の格式ある仁王門だそう。本堂も落ち着いた佇まいで風格が感じられた。

酒匂川の肥えた氾濫原が豊かな稔りをもたらす穀倉地帯でもあったのであろうか、在の豪族の相当の喜捨が寺の興隆に預かっていたのであろう。また、小田原城の丑寅（北東）の方角にあったことから小田原城の鬼門の守り寺でもあったそうだから、それなりの大寺であったのであろう。



（風格のある本堂）

境内には四国遍路八十八霊場の本尊が刻まれた88体の石仏が建っていたが、相当に古そうであったから、当時としてはこの建立にも相当の布施があったであろう。

この寺の手水鉢はちょっと変わった形のものであった。手水鉢全体が龍の身体になっていて胴が水溜、尾の上には観世音菩薩が鎮座されていた。龍体が作り付けられている手水鉢は、普通は龍の口から清めの水が垂れているが、この手水鉢には龍口に水の垂れ口が無かったので、手を洗い口を漱ぐのにどうすれば良いのか、ちょっと戸惑った。中々品格に富む青銅製の器であった（次ページに写真）。

さて、この寺の開基は、悪名高い弓削道鏡だそう。道鏡は孝謙女帝の夜の御伽として女帝をして色に狂わせ、その結果女帝は^{まつりごと}政を放ったらかして同じセイでも喜悅の性の方に明け暮れたので世が乱れた。弓削道鏡は出自が山伏であったのでどこかの寺の開基であったとしても不思議ではないが、坂東三十三霊場にも、その原型となった西国三十三霊場にも、また四国遍路の八十八カ所にも道鏡開基と伝え

る寺はこの寺以外には一寺も無い。仮にそのような縁起があったとしても、悪人の道鏡を避けるのが普通であろう。

この寺の寺伝によれば、左遷されて下野ノ国に流された道鏡がこの地を通りかかった折に観世音菩薩の感得を得て、女帝から賜って笈に入れて供奉していた十一面観音をここに堂宇を建立して安置したのに始まると伝えられている。マ、何れにしても盲伝承ではあろうが、足柄山を越えて初めて坂東の地に足を踏み入れた都人が何らかの感興を得たのかもしれない。



(龍体の手水鉢、龍尾に観世音菩薩像)



【飯泉山勝福寺】真言宗 本尊：十一面観世音菩薩

【御詠歌】かなはねば たすけたまえと 祈る身の 船に宝を つむはいいづみ

(参詣日 2018/01/27)

第六番 飯上山 ^{ちょうこくじ}長谷寺 (飯山観音)

この寺は相模地方では名が通っている観音様で、本厚木駅から宮ヶ瀬ダムに行くバス道路沿いにあるので、東丹沢方面のハイキングに行った折に何回か通ったので、その門前の赤い橋には記憶があった。

本厚木駅から北へバスで30分、飯山温泉の少し手前にある。寺は標高200m程の白山の山腹にあるのだが、山門を潜ってからの石段が長くて腰椎骨折の病み上がりの身体にはこたえ、途中の踊り場で何回か立ち休みをしなければならなかった程であった。

山腹の境内は広く、かつては大伽藍であったと思わせる佇まいであった。その最頂部に灯籠の長い並びを従えた観音堂が鎮座していた。屋根の方形の美しい反り加減が裏山に溶け込んでいて、なかなかの山寺の風情であった。

境内からは厚木の市街地が眼下に眺められた。大きな古色蒼然とした宝篋印塔も建っていてこれも周囲の景色に溶け込んでいた。

また、境内の諸処に祀られた仏像にはどれにも真新しい蜜柑が供えられ、周囲も掃き清められていて住持の心遣いが感じられた。惜しむらくは、観音堂の横に現代風の小屋が建てられていて（中写真左）これが納経所になっているのが些か邪魔であったが、参詣者が自由に観音堂の中に入って拝めるようにしてあるためにその警備も兼ねている詰所でもあろう

から、やむを得ないことであらう。

寺の近くに蠟梅のひろばという園地があったので序に寄ってみた。数十本の蠟梅が満開であった。



【飯上山長谷寺】

真言宗 本尊：十一面観世音菩薩

【御詠歌】

飯山寺 建ちそめしより つきせぬはいりあいひびく 松風の音

— 16 —



(参詣日 2018/02/05)

第七番 金目山 光明寺（金目観音）



平塚と秦野の間の金目川沿いにある極く小さな寺であった。たぶん、かつては在の農民たちが朝夕お参りしていたような庶民派の観音堂だったのであろう。今は金目川土手の桜並木とその先に見える富士山を売り物にした「平塚八景」の一つとなっているらしいが、真冬の今は参詣者は誰も居らず、灯明台にもローソク 1 本灯っていなかった。

寺の縁起によれば、開基は飛鳥時まで遡り、北条政子の安産を祈願した源頼朝の祈願寺で、徳川時代には徳川家光の祈願寺にもなって往時は 2600 坪の大伽藍を誇っていたそうであるが、今はその面影も無く取り残されたようにひっそりと佇んでいた。ひっそりとした寺の風情もこれまたよろし。



（観音堂に掛かっていた天女の像、観世音菩薩の垂迹か？）

【金目山光明寺】天台宗 本尊：聖観世音菩薩

【御詠歌】なにごとも いまはかなひの 観世音 二世安楽と たれか祈らむ

（参詣日 2018/01/27）



第八番 妙法山持寶院星谷寺（星の谷観音）^{しょうこくじ} [神奈川県座間市]

寺号から想像するに深山幽谷にある星祭りの修験の寺かと思えるが、実際は街中にあるごく普通の小さなお寺であった。行基菩薩が開基した由緒ある寺院だそうだが、伽藍といっても小さな観音堂があるだけで、往時の隆盛を偲ばせるような堂宇は何も無かった。昔から在の檀家だけが観音詣りしていた庶民の小寺であったのかも知れない。

最近では葬式や法事などで食っているのか、最近建てたばかりのような式斎場だけがピカピカと輝いていてちょっと場違いであった。

納経所（札所）も、味もそっけもないコンクリート作りで、支払いは自動券売機であった。その内、ご朱印も自動スタンプ機になるかも・・・マ、お寺の経営もいろいろと大変なのであろう。



（入口の仁王像は堂々たるものだったが・・・）



（観音堂）

この寺には、いつも花を咲かせているという不断桜、普通は花全体がボタと落ちる椿の花の花弁が一枚ずつ散るというナントカ椿、揺ると中から水音が聞こえるという楠の化石、昼でも星を映しているという星の井戸などの「七不思議」の瑞兆があるという。寺の瑞兆などと言い伝えられているものは通例は眼に見えない抽象的なものであるから『信じる者は救われる』の類であろうが、この寺の「七不思議」と称されているものはその現象が目や耳で確認できる類のものばかりであるから、或いは本当に顕れる瑞兆かもしれない・・・と思って、星の井戸を覗いて見たら次頁の写真の如くであった。マ、これは当然の理であるが、さすれば残りの6つの不思議もやはり胡散臭いではなかろうか。

さはあれど、観音堂の扁額の下に掲げられていた天女の絵（下写真）はなかなか艶めかしくてよろしかった。これこそ観世音菩薩の御利益というモノであろう。うっとり拝していたので、肝心の御本尊・聖観世音菩薩にお詣りしてこの“目の薬”のお礼を申し上げるのを忘れてしまった。



また、観音堂の前に建っていた宝篋印塔は江戸時代に建立された近郷に例を見ない大型で美しい宝篋印塔だそうで、その均整のとれた姿はなるほど心が和むようであった。



（雑草に覆われた星の井戸）



（宝篋印塔）

【妙法山持寶院星谷寺】真言宗 本尊：聖観世音菩薩

【御詠歌】障りなす 迷ひの雲を ふき払ひ 月もろともに 拝む星の谷

（参詣日 2018/01/13）



第九番 都幾山 一乘法華院 慈光寺 [埼玉県比企郡都幾川町]



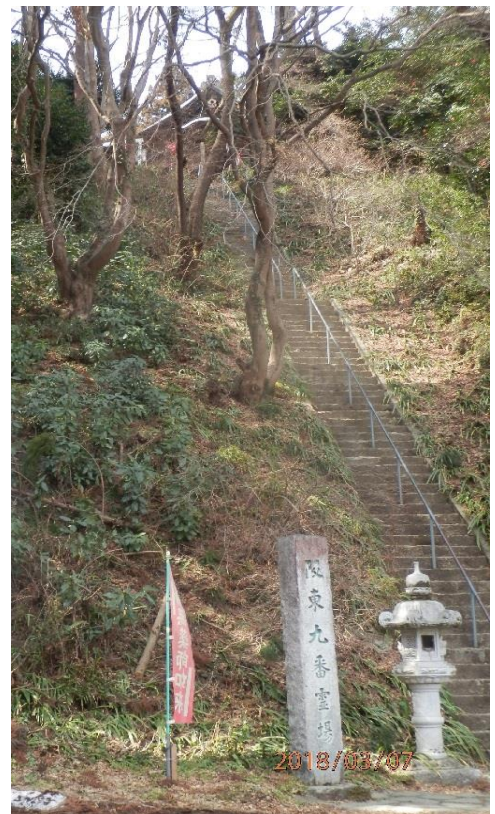
この寺は、ちょっとどころか随分と不便な場所にあった。埼玉県でも西のはずれの秩父に近い山中である。東武東上線の武蔵嵐山駅から路線バスとデマンドバスを乗り継がないと行けないが、本数も限られているので実に不便な所であった。周辺は山また山の林業地帯のようだった。坂東三十三観音の寺院はその殆どが町中にあるか、田舎にあってもまずは田園地帯であるから、久しぶりに山奥の修験の寺に登ったような気がした。

なるほど、この寺は飛鳥時代 674 年の開基で関東では最古の山岳寺院であるそう。都幾山という標高 463m の低山の中腹にあるのだが、境内は結構峻しい斜面にへばりついているので、なるほど修験の寺であったことを偲ばせる。

観音堂（上の写真）への登りの最後の石段は殆ど垂直かと思われるほどの急階段で腰椎骨折の身には、途中で何回も休まないと登り切れなかった。

観音堂は質素な建物であったが、それなりに歴史を感じさせる風格があった。

（垂直な石段の上に観音堂が見える⇒）



この寺は開基 1300 年の古刹で、往時は武蔵国比企ノ庄の政治・経済・文化を統括していた大寺で、その寺の番匠の伝統技術が現在も有名な「都幾川の建具」や小川町の手漉き和紙、狭山茶などに引き継がれているようだ。

往時の寺の繁栄を偲ばせるかのような大きな沢山の板碑が参道脇に集められていた。どれも由緒ありげな立派なものであるらしかった。



観音堂の天井には白馬の彫刻が祀られていた。伝承によれば、この彫刻は左甚五郎作の白馬で、元は境内に祀られていたが、夜な夜な麓の畑に出掛けて作物を荒らすので、困り果てた百姓がお寺にお願いして観音堂の天井に繋ぐようにしてから被害が無くなったという。

実は、これと全く同じ白馬の伝承が先般詣でた第 28 番「龍正院」（千葉県成田市在）にもあったから、坂東観音では珍しくないことかも知れない。



観音堂から本堂に下って納経した。納経は靴を脱いで本堂に上がり、本堂御本尊阿弥陀如来の前でご朱印を頂く仕掛けになっていた。隠居風情の老住職が出てきて、これは暇を持て余していたところにいいカモが来たワイと説教のウンチクを垂れはじめた。曰く、「貴公は、風呂から上がってパンツを穿

く時に手で何回パンツを触るか考えてみたことがあるか？」。

いったいこれは何を言い出したのじゃ、何の説教かいナ？。住職曰く、「パンツのゴムの左右前後を握って引き上げて4回、男なら玉と棹も握るのでこれで2回、合計6回じゃ、どうじゃ、マイッタか！」。

参るも参らないも、何が何だかサッパリ分からぬではないか。怪訝な顔で聞いていたら、住職また曰く「貴公は修業が足らん。自分以外の人びとには絶対頼めないものがある。例えば物を喰うとか排泄するとかいう行為じゃ。このような行を一日に何回するかを勘定してみろ。このような行いを数えてみるのが、即ち、かけがえのない自分自身を顧みることであり、これが即ち“唯我独尊”ということじゃ」。

住職続けて曰く、「赤ん坊の時には、これらは全て母親がやってくれた。当山の観世音菩薩サマはお優しい母親の姿をしておられる」と言って、御本尊・阿弥陀如来の脇に祀られている千手*千眼観世音菩薩の左手の一番下の向きを見て見ろとノタマッタ。暗くて良く見えなかったが、この左手は掌が後ろ向きになっていた（右の観世音菩薩の白○内）。

住職の話では、普通の手（例えば右手の一番下の手）は掌が前に向いていて、これは衆生の悩みや苦しみを救い上げるために前に向いているのであるが、この左手の一番下の掌は後ろ向きになっていて、これは背中に子供を背負っている手の形だそうで、観世音菩薩の慈悲を表わしているのだそう。住職は、普通の観世音菩薩にはこのような掌の向きは少ないので、この寺の千手千眼観世音菩薩はそれだけ有り難い仏様であることを強調するのを忘れなかった。住職重ねて曰く、「ところで貴公は、“観音”という意味をご存じであるか？」。恥ずかしながら小生、“観音様”とは女人の身体の有り難いある部位の俗称というくらいしか知らなかった。

衆生の苦しみや悲しみを救い上げるために“観”たり、“音”を聞いたりされるのが観音菩薩であるという。ナルホド、なるほど、マイッタ、まいった。しかし考えてみれば、印度仏教のカーマストラという有り難い経典には、精神の解脱には肉体の開放が欠かせないと書いてあるではないか。

住職はこのような説教を長々と垂れたものだから、日に2本しかない麓のバスの発車時間に間に合わせるために30分間ほど山道を駆け下りたが、僅か30秒ほどのことで、このバスに乗り遅れた。結局は途中のバス乗り換えセンターまでのタクシー代5,000円と接続バス待ち1時間のロスと相成ったが、マ、



観音サマの“正しい”意味を認識できたことがこれらの出費のお布施と思えば、それはそれで有り難い功德でもあろう。

しかしながら、帰りの電車の中で隣に座った高校生らしき若者が怪しげな咳を連発し、たぶんこの若者からインフルエンザ菌を感染させられたのであろう、翌日からインフルエンザで10日間ほど寝込んで苦しんだので、この功德の験も無かった。マ、未だ未だ修業が足らんワイ。

【註】千手*千眼観音菩薩

千手観音菩薩と言っても、手の数が本当に千ある千手観音菩薩像は稀で、大抵は42本が多い。

また、各手には眼が刻まれているので千手千眼観音菩薩とも呼ばれる。

手や眼の数が多いのは、それだけ沢山の衆生を済度するためである。

【都幾山 一乘法華院 慈光寺】 天台宗 本尊：十一面千手千眼観世音菩薩
(本堂本尊は阿弥陀如来)

【御詠歌】 聞くからに 大慈大悲の 慈光寺 誓いも共に 深きいわどの



(参詣日 2018/03/07)



第 11 番の吉見観音を先に打ってから、同じ日に逆打ちでこの寺に詣でた。吉見観音の最寄駅である東武東上線「東松山駅」から川越方面に一駅乗った「高坂駅」からバス便があった。歩けば 1 時間以上掛ったであろうからこのバス便は助かった。

上の写真のとおり、山中の広い境内には山の気が満ち満ちていて、どこかに天狗でもいそうな雰囲気であった。また、灯籠の様子などからも神仏混淆時代の様相が濃く感じられる寺であった。境内には先日降った雪が未だ諸処に残っていた。



この寺は開山 1300 年だそうで、朱印帳にも金色の「開山 1300 年」の朱印が特別に押されていた。鎌倉時代には一山 60 余坊の大寺であったそうで、近世には観音霊場詣りの巡礼者で賑わい、境内には茶店が立ち並んで繁盛し、また門前は巡礼者用の宿屋や商い屋が栄えたらしい。なるほど、今でも門前通りが残っていて往時の宿屋の古い看板などが残っていた。

納経を済ませて帰路の道を住職に聞くと、住職もこれから高坂の街に用事で出掛けるので車で駅まで送って行こうとの有り難いお言葉であった。これも観音菩薩の仏縁であろう。道の途中で同じく参詣されて歩いて帰っていた巡礼も拾われた。

この寺も、一つ前に詣でた吉見観音も宗派は同じ真言宗智山派であり、また山号も「岩殿山」と「巖殿山」であるので、かつては同じ寺で少し山寄りの吉見観音がこの岩殿観音の奥之院であったのかもしれない。ここの住職の話では、吉見観音の住職は彼の弟であるそうだ。

【巖殿山 正法寺（岩殿観音）】 真言宗智山派 本尊：千手観世音菩薩

【御詠歌】 後の世の 道を比企見の 観世音 この世を共に 助け給へや

(参詣日 2018 年 2 月 13 日)



第十一番 岩殿山 安楽寺（吉見観音）

[埼玉県比企郡吉見町]

この寺も埼玉県の観音札所の例に洩れず交通の不便な場所にあった。最寄駅は東武東上線の東松山駅であるが、ここからの路線バス便はなく、歩けば1時間半くらいの距離である。

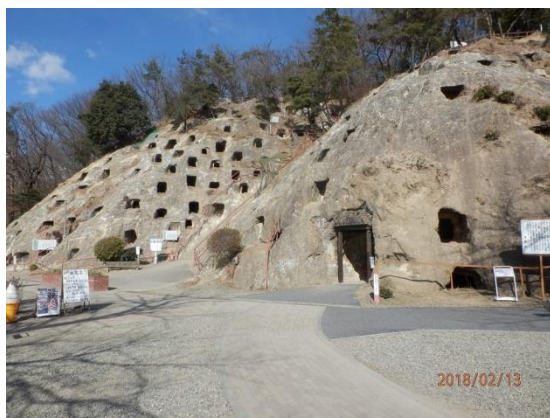
この辺りの比企丘陵にはハイキングルートが縦横無尽に作られているようで、花のシーズンになれば花を見ながら半日程度の地道ハイキングが大繁盛だそうで、その途中にこのお寺もあるから、参詣者は春や秋に多いらしい。

さて、今は真冬の一番寒い時期だったので、東松山駅からタクシーを奮発したが、タクシーの台数が少ないのか、大いに待たされた。

田園地帯のちょっとした里山にある境内は、大伽藍というほどのものではなかったが、清潔に掃き清められていて、なかなか落ち着いた雰囲気だった。植木も庭師の鋏が絶えず入っている様子で、お布施もそれなりに多い観音寺院なのであろう。観音堂（写真中央）の右横に建っている三重塔も派手ではないが、どっしりとした佇まいであった。

観音堂には古い千社札がびっしりと貼られていて、往時からの観音巡礼者の参詣が多かったことを窺わせた。

帰途もタクシーを呼んで東松山駅に戻ったが、その途中にある吉見百穴という穴に寄ってみた。小高い丘の山腹に無数の横穴が掘られていて、古墳時代の横穴墓群だそうだ。



穴の数2百数十個。また、太平洋戦争末期には、大宮にあった中島飛行機のエンジン製作工場を疎開させるために巨大な地下壕が掘られたが、工場が稼働する前に敗戦となって、今は巨大な洞窟だけが残されている。これらの穴に終戦後の混乱期には箕作りサンカなどが住み着き、被差別民のアジールとなっていたこともあったという。

穴の前にあったうどん屋のオバサンの話では、上記の吉見観音の裏山には黒岩横穴墓群という穴の数が5百基くらいもあるこの倍くらいの規模の大きな横穴古墳群があるそうで、これは知らなかったので見逃したが残念なことをした。

吉見百穴のすぐ近くには岩室観音堂という狭い岩壁の間に建てられた懸造り様式の御堂があった。切りぬかれた岩室の中には四国八十八札所の石仏が置かれていて超ミニ辺路がしつらえてあった。

帰りに、逆打ちで第十番「岩殿観音」に詣でた。



(懸造り様式の岩室観音堂)



(岩室に祀られた四国八十八札所の石仏)

【岩殿山 安楽寺（吉見観音）】 真言宗智山派 本尊：聖観世音菩薩

【御詠歌】 吉見よと 天の岩戸を 押し開き 大慈大悲の 誓いたのもし



(参詣日 2018年2月13日)

第十二番 華林山 慈恩寺 (慈恩寺観音) (さいたま市)

東武野田線で大宮から約20分、埼玉平野の田圃の中にある豊春駅という小さな駅で降りて30分ばかり県道を歩いた。歩道が無い道だったので車に轢かれそうになったが、バスの便などは無かった。

寺の前の駐車場にはインドやネパールでよくお目に掛かるキンピカ満艦飾のトラックが沢山集まっていて、本堂ではこのトラック野郎達の交通安全祈願が行われていた。トラック野郎達は全員丸坊主、ダボダボのニッカボッカ姿でちょっと観音霊場にしては異様な雰囲気であった。そのようなことで、ゆっくりと観世音菩薩を拝観する雰囲気でもなく早々に退散したので、書くことがない。

この寺は、中世には66坊の大寺で、また、徳川家康から寺領100石を拝領した格式の高い寺だそうであるが、今は観音堂が一堂あるだけで往時の面影は無かった。その観音堂も風情が感じられなかった。

ただ、本堂のある境内から少し離れた田圃の中には玄奘三蔵法師の霊骨を分骨奉納したという玄奘塔なる十三重の石塔が建っていて、こちらの方は道路から離れた田圃の中の鎮守の森にあったので幽邃な感じがした。この玄奘の霊骨は、当時の日本軍が南京を占領して駐留していた時に中華門外に日本の神社を建てるために土地を整地していたところ石棺が出土して、この石棺の主は玄奘三蔵、石棺の中に残っていた遺骨は頭頂骨と判明し、駐留軍の威力でその遺骨の一部を日本軍が横領したのであろう。当初は芝の増上寺に納められていたらしいが、空襲の危険を避けるためにこの慈恩寺に疎開させられ、そのままになっていたのを新たに十三重の石塔と三蔵法師像を建立して霊骨の分骨を祀ったという。

帰りも、車が輻輳する狭い県道をトコトコと歩いて豊春駅に戻り、途中の乗換駅の大宮駅で赤澤さんと落ち合って駅前の呑み屋で昼過ぎから一献傾けた。ちょっと一杯のつもりが、気が付いたらなんと6時間もやっていた。磯丸水産という居酒屋で、“午後の部は生ビール1杯278円”という値段について騙されて杯を重ねたのであろう。

(玄奘塔と玄奘法師像)



【華林山 慈恩寺 (慈恩寺観音)】天台宗 本尊：千手観世音菩薩

【御詠歌】慈恩寺へ 詣る我が身も たのもしや うかぶ夏島を 見るにつけても (参詣日 2018/2/18)

第十三番 金龍山 浅草寺（浅草観音） （東京、浅草）

坂東33観音札所は、札所の分布状況で見ると関東の中心である東京都（江戸）には1ヶ所しかない。一番多いのが神奈川県（9ヶ所（内4ヶ所は鎌倉））、次いで茨城県、千葉県、栃木県、埼玉県などの各数ヶ所となっている。中心のお江戸に1ヶ所しかないというのは不思議な気がするが、考えてみれば坂東33観音札所詣の習慣が始まったのは江戸ができるより遥か昔の鎌倉期であって、当時の鎌倉武士の出自は相模、安房、上総、下総、常陸、上野、下野であり、現在の東京都である武蔵ノ國は当時は未だ草深い田舎であったのか、或いは鎌倉幕府に服従していなかったのかに拠るのであろう。

さて、とはいえ、東京都唯一の札所である浅草寺は、やはり他の坂東33観音の寺とは何か本質的に違っているようで、それは、例えば仲見世の賑わいなどにも現れているようだ。仲見世通りの混雑の具合は、もう凄まじいものとしか言いようが無かった。その人通りの大半は外国人、その内の殆どは中国人であったから、その喧しきは尋常ではなく、デジカメ自撮の棒がニョキニョキと空中で交差していて何とも腹立たしい。本堂も彼等の出入りが激しくてお経を供読できる雰囲気も無かった。

戻されたご朱印帳に挟まれていた吸い取り紙には「ご朱印について」という印刷書きがあって、「近年は本堂にも参らず納経所でご朱印だけを集めてスタンプ・ラリーをするだけの人が多いが、ご朱印を頂く前に、般若心経一巻、或いは観音経偈文を書写納経するか、せめて朗読して欲しいと書かれていた。そのとおりであって、書写納経は無理としても、般若心経かせめて十句観音経くらいは唱奉したいもの」と、これは自戒でもある。



（江戸時代の浅草参詣図）



（仲見世通り）

【金龍山 浅草寺】聖観音宗 本尊：聖観世音菩薩

【詠歌】ふかきとが 今よりのちは よもあらじ つみ浅草に まいる身なれば （参詣日：2018/06/21）



（弘明寺 観音堂）

この寺は1週間ばかり前に行った鎌倉長谷寺のような観光名所の大寺とは異なり、その辺の町内のご隠居達が杖を突いて毎日線香を上げに来るような庶民的な寺であった。

街中のちょっとした高台にあり、裏山には海洋性の常緑樹が繁っていて陽光明るい雰囲気のある境内であった。

寺伝によれば、ここは横浜で一番古い寺院だそうで、国宝の本尊の十一面観世音菩薩は行基菩薩作の一木彫りと伝えられ観音堂の内陣の奥の厨子に鎮座ましましていたので定かには拝せなかったが、古来から信仰を集めている観音様だそうなので



（弘明寺本尊 十一面観世音菩薩 同寺 HP より引用）

（本尊拝観料 500 円也を喜捨すれば内陣に上がって御身近に拝めるそうである）。寺の興亡が激しく、堂宇も荒廃していたものを近代になって修築されたものの由、ちょっと古色に欠けるが、寺の存在意義は寺格・寺歴や、寺宝などの優劣・多寡によるのではなく、御住持の衆愚道導の如何によるものであらうから、この寺も弘明寺観音詣の老若が多数参詣しているなら、それはそれで観世音菩薩の靈験というものであらう。お札やお守りの授与も繁盛しているようであったので、結構なことである。

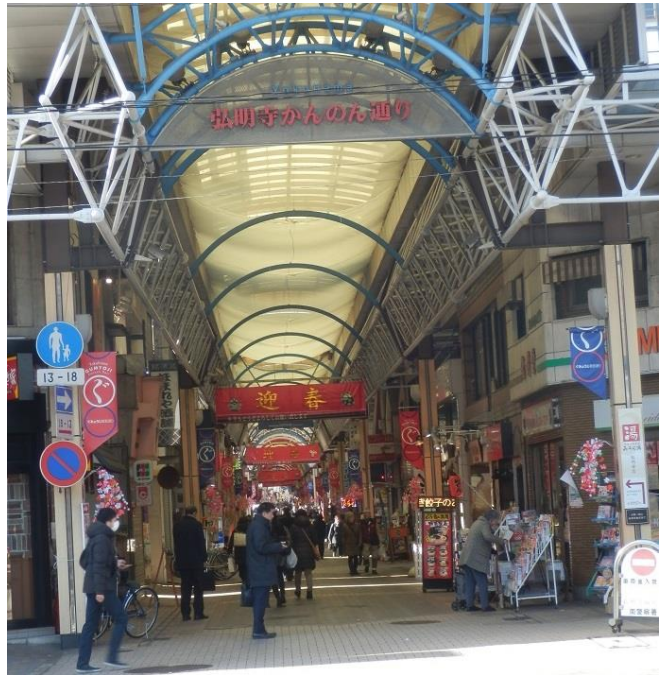
横浜市営地下鉄・弘明寺駅からこの寺の仁王門までの一直線の大きな参道は、両側に店が並んだアーケード門前町になっていて、郊外のアーケードにしては人通りで賑わっていた。その名も「弘明寺かんのん通り」。一部はシャッター街になっていたが、かつては多くの参詣者で賑わっていたのであらう。

話は飛ぶが、この弘明寺駅の近くには放送大学横浜学習センターなるキャンパスがあって、会社をリタイアした20年近く前に暇つぶしに放送大学なるものに入學して集中講義などを聞きにこのキャンパスに通っていたことがあった。その帰りにチョット一杯でよく立ち寄っていた駅前の寿司屋が未だ健在であったので懐かしくなって、当時と同じメニューのランチ寿司を食ってきた。価格も変わっていなかった。店の名を「いなせ寿司」という。

【瑞應山蓮華院弘明寺（弘明寺観音）】

真言宗 本尊：十一面觀世音菩薩

【御詠歌】 ありがたや ちかひの海を
かたむけて そそぐめぐみに
さむるほのやみ



（弘明寺かんのん通り）



（参詣日 2018年1月10日）

第十五番 白岩山 長谷寺(白岩観音) [群馬県高崎市]

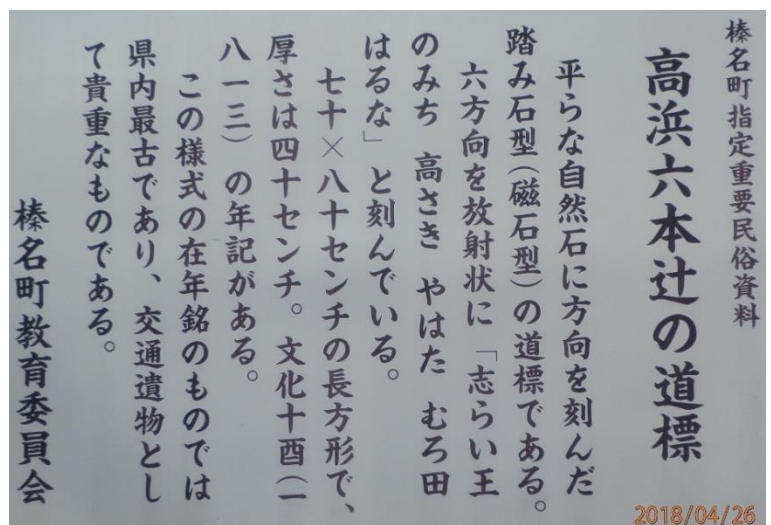
高崎市の近郊とは言え、この寺も不便な場所にあった。この寺に来る前に巡った16番水沢寺からバスで1時間、一旦高崎駅まで戻り、改めてまたバスで1時間、バスを降りて丘陵地を歩くこと更に1時間でこの寺に辿りついた。

さほど鄙ではないのに、参詣者は一人もいなかった。坂東三十三観音詣りの寺には入ってはいるが、本来は金峯山修験の山伏寺であったそうだから、人が少ないのはその為かもしれない。

丘陵地の道は結構な登り坂で、腰椎骨折療養中の身には些かキツイ道中であったが、ノンビリした里山や畑の中の道を歩くのも趣があった。眼下には高崎や前橋の街並みが手に取るように眺められた。

途中には往時の道しるべが保存されていて、ここが当時の大きな街道であったことが偲ばれた。下の写真で中央下の平らな石が方向指示石である。

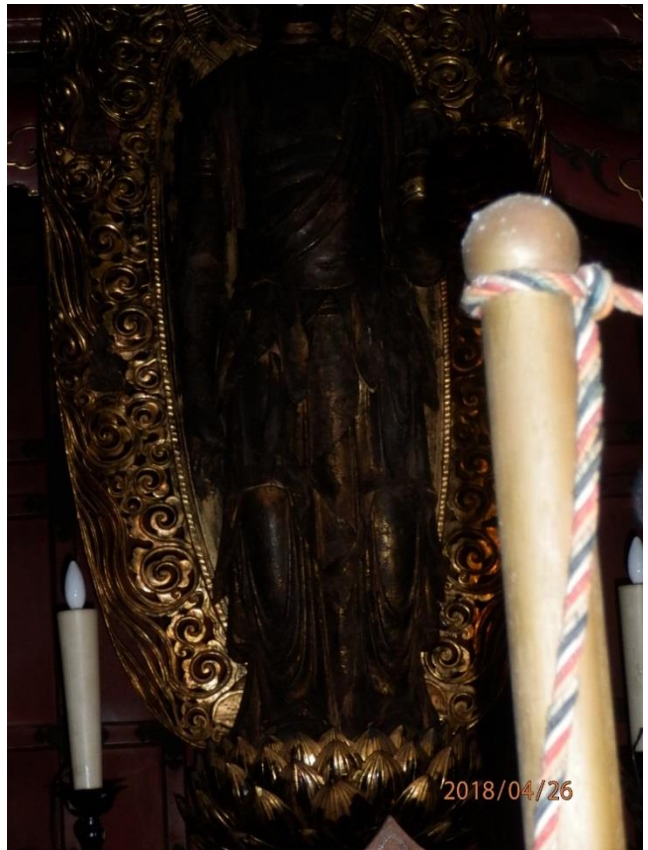
また、その右の標石は、これまた古色蒼然としたものであったが、次ページのように刻まれていた、



この寺の御本尊は、平安時代作の木造十一面観世音菩薩立像で秘仏、同じく前立も木造十一面観世音菩薩立像で鎌倉時代作の群馬県指定重要文化財だそう。拝観料 200 円也を払ってご尊顔を拝見してきた。



(左 はるな、右 志らい王 (白岩))



(前立本尊 十一面観世音菩薩)

【白岩山 長谷寺 (白岩観音)】金峯山修験本宗 本尊：十一面観世音菩薩

【御詠歌】誰も皆な 祈る心は 白岩の 初瀬の誓ひ 頼もしきかな



(参詣日 2018. 04. 26)



群馬県内の坂東三十三観音寺は2ヶ寺しかない。渋川にあるこの水沢観音と、少し離れた高崎市の郊外にある白岩観音である。拙宅のある神奈川県から見れば、この2寺は直ぐ近隣にあるように見えたので同じ日に廻って来たが、なかなかどうして近いなどというものではなかった。2寺を結ぶバス便はないので、夫々高崎駅を起点にしてピストンしたが、結構時間が掛かった。

まずは、水沢観音から。

水澤の地は江戸へ三十六里、日光へ三十六里、善光寺へ三十六里という交通の要衝にあり、近くには南北朝時代からの名湯・伊香保温泉もある。水沢観世音寺は千三百有余年前に推古天皇・持統天皇の勅願でここに開基された古刹。歴代天皇の勅願寺、上野ノ國の国司の菩提寺としても栄え、かつては千数百体の仏像を蔵して栄えた大寺という。再三の災火で伽藍は数えるほどしか残っていないが、なるほど、本堂や仁王門にも往時が偲ばれる風格があった。

特に六角堂二重の塔（上右側の御堂、地藏堂）は、上下左右のバランスといい、屋根の流れや反り具合と言い絶品であった。我が国に於ける地藏尊信仰の代表的建築物だそうで、内部にある回転する六地藏尊は地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間界、天人界の六道を守る地藏尊で、六道輪廻の相を表しており全国的にみても非常に珍しいものだそう。3回廻せば願い事が叶うということだが、罪深い小生はオマケに2回廻しておいたので、閻魔大王のお裁きも罪一等軽くなるかも知れない。

また、往時から今日まで観音信仰の参詣者で賑わい、そのため今でも境内には土地で採れた野菜や農産物を商う多くの露店が軒を並べていた。

仁王門も立派な結構であった。立札に曰く、“近世寺院建築特有の華麗さを遺憾なく発揮し、上下の均整のとれた楼門として最高の位置を占める名建築”とあった。ナルホド。

（仁王門⇒）

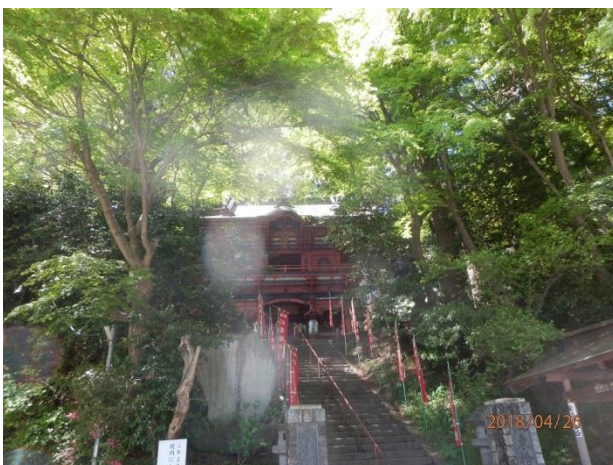


仁王門は彩色の彫刻で飾れており、また風神・雷神も住んで居られた。天井には2匹の龍も住んでいて、ナントカいう狩野派の有名な絵師の作であるそうな。龍を見上げていたら、首が痛くなってきた。



(何やら人間臭い龍?)

昼飯に門前の名物・水沢うどんを肴に般若湯を頂戴した。裏山は登山でも有名な水澤山、1,194m。



【五徳山 水澤寺】天台宗 本尊：千手観世音菩薩

【御詠歌】たのみくる 心も清き 水沢の 深き願いを うるぞうれしき



第十七番 ^{いづるさん}出流山 満願寺（出流観音）（栃木市）



JR 両毛線栃木駅からコミュニティーバスで約1時間、バスは田植の終わったばかりのみずみずしい田園地帯を抜けて山間部の峪間をウネウネと登って行った。峪間に入ると集落は無くなり、石灰の採掘場が次々に現れて、道路は石灰運搬のダンプカーばかりとなった。路面も周囲も石灰の埃だらけで白っぽく霞んでいた。山の斜面も削り取られて無残な姿になっていた。この辺りは石灰岩の産地なのであろう。

やがて山中に突然小さな集落が現れた。ここがバスの終点で、その奥にこの寺があった。どうしてこのような人も住まない山の奥の奥に寺が出来たのであろうか。集落は10軒にも満たないような小さな集落で、その殆どが蕎麦屋であった。昔から出流蕎麦^{いづる}として名物になっているそうだ。この寺は観音講の団体でお詣りする人が多いらしいから、蕎麦屋の門前町ができたのかも知れない。

さて。

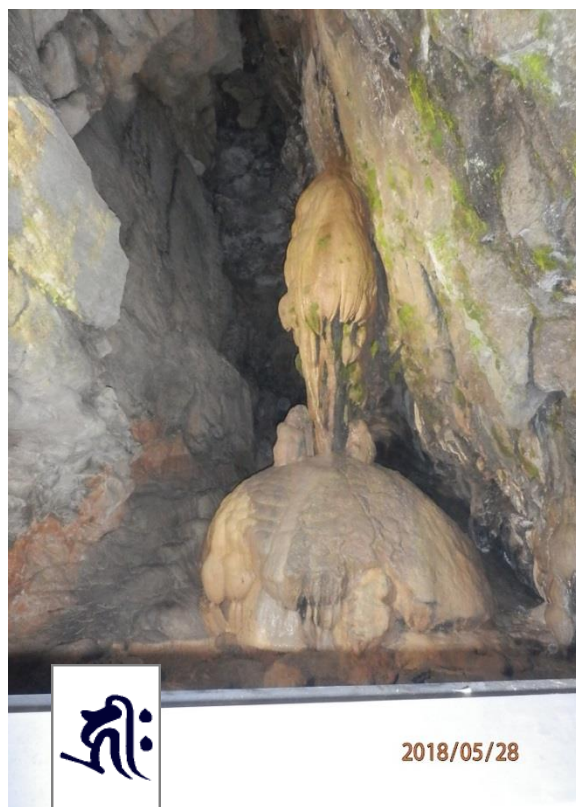
この寺は、1200年前に役ノ小角がこの地に霊窟（鍾乳洞）を発見し、その中の鍾乳石が千手観音像に見えたのでこれを祀ったのが始まりだそうだ。当時の下野ノ國の國司の妻が子宝に恵まれず、この霊窟に21日間籠ったところ翌年子供が生まれ、この子供が長じて日光山開祖の勝道上人になったところから、この寺の開基もこの勝道上人であると伝えられている（開基は天平神護元年、765年）。この鍾乳洞の霊窟が今の奥之院であり、拝観料300円也をお布施にして拝観する仕掛となっている。

そのような次第でこの奥之院は子授け、安産、子育てに験があるそうで、この日も若い母親が幼い子供の手を引いてここまで登ってきていた。下の本堂から急な山道を30分くらい登ってこなければならぬので、幼い子供には少しキツイかもしれない。若いカップルもいたが、子供が授かったかどうか。

奥之院の直ぐ下には大悲ノ滝という小さな滝があった。今でもここで滝行の修業を経験できるそうだが、今日は水が枯れていてチョロチョロであった。



(奥之院 霊窟)



(同 自然鍾乳石の千手観音)



(本堂)

境内には折からの深緑が映えて眩しかった。境内も広く、伽藍も整備されていた。旅館のような大きな信徒会館もあったが、団体の観音講のお詣りが多いのであろう。近辺には集落も無いので、護寺費用は専ら講詣りで賄っているのかもしれない。



(滝行の大悲ノ滝)

【出流山 満願寺（出流観音）】 真言宗 本尊：千手観世音菩薩

【詠歌】 ふるさとを はるばるここに たちいづる わがゆくすえは いづくなるらん



中禅寺は東照宮で有名な日光山輪王寺の別院であり、輪王寺がある日光駅から「いろは坂」を上った中禅寺湖の湖畔にある。家を出てから中禅寺に辿り着くまで、JR 東海道線・東北線・日光線の鈍行と日光から中禅寺湖までのバスを乗り継いで6時間掛かった。新幹線で言えば、東京から鹿児島まで行ける時間であった。

縁起によれば、輪王寺の開祖・勝道上人が中禅寺湖上に千手観音を觀じ、その姿を桂の生きた立木に彫ったという十一面千手觀世音菩薩（重文）が本尊である。觀音堂では5分間程度のツアーが随時行われていて金500円ナリの拝觀料で寺男の説明を聞く仕組みになっている。重文の御本尊をすぐ近くで拝顔できるので、金500円は高くない。御本尊は高さ二丈（6尺）の觀音像であった。

勝道上人とやらが直径1尺以上の太くて高い幹にどのようにして登って、どのようにして幹にぶら下がって鑿を振ったのか、生きた木に彫った仏像をどのようにして御堂の仏座に据え付けたのか不思議だったので、説明役の寺男に質問してみた。

「サア～？、仏頭の上の部分の幹を切り倒したのではないのでしょうか。根の部分は今でも地中に埋まっているそうです・・・云々」。どうも納得できる回答は得られなかった。それもその筈、この種の寺伝は後世に作られたものが殆どなので、ちょっと意地悪な質問であった。寺男もその辺は心得たもののようで話しながらニヤリと笑ってみせた。

（中禅寺觀音堂 立木観音 両脇は觀世音菩薩を守護する四天王 同寺 HP から引用）



不動明王、降三世明王、軍荼利明王、大威徳明王、金剛夜叉明王の五大明王が安置された五大堂からは、目の前に中禅寺湖や男体山が眺められて誠に結構な景色であった。関東地方の最高峰・日光白根山方面に沈む夕陽の残照が中禅寺湖の湖面に映る様はまさに山越の阿弥陀来迎図、極楽曼荼羅絵ではなかろうか。そういえば、前ページの立木観音の上に掲げられている扁額には「補陀落山発心口門」と書かれていた。補陀落山とは観音菩薩がお住まいになっている極楽霊場であり、発心とはその道への功德精進を目指すことである。



(五大堂から中禅寺湖、右は男体山)

中禅寺湖の直ぐ下には有名な華厳の滝があり、かつて一高生だった藤村操が「人生不可解」という遺書を滝の落ち口の立木に刻んで身を投げたが、世情言われているように人生の生き方を悩んで死を選んだのではなく、勝道上人のように中禅寺湖の湖面に映った夕陽を観世音菩薩ご来迎と見間違えて、喜んで（或いは間違えて）補陀落渡海に旅立ったのではなかろうか。

或いは、同じ観世音菩薩を観じて、それを勝道上人は立ち木に仏像として彫り、藤村操は遺書に刻んだという違いかも知れない。

余談であるが、この立ち木に刻まれた遺書「巖頭之感」は当時の警察によって削りとられ、立木も伐採されたそうであるが、刻まれた遺書の写真だけは残っていて、今でも滝の茶店でこれのレプリカ・コピーを土産物として売っているのは如何なものかと思う。ちょっと横道に逸れた。



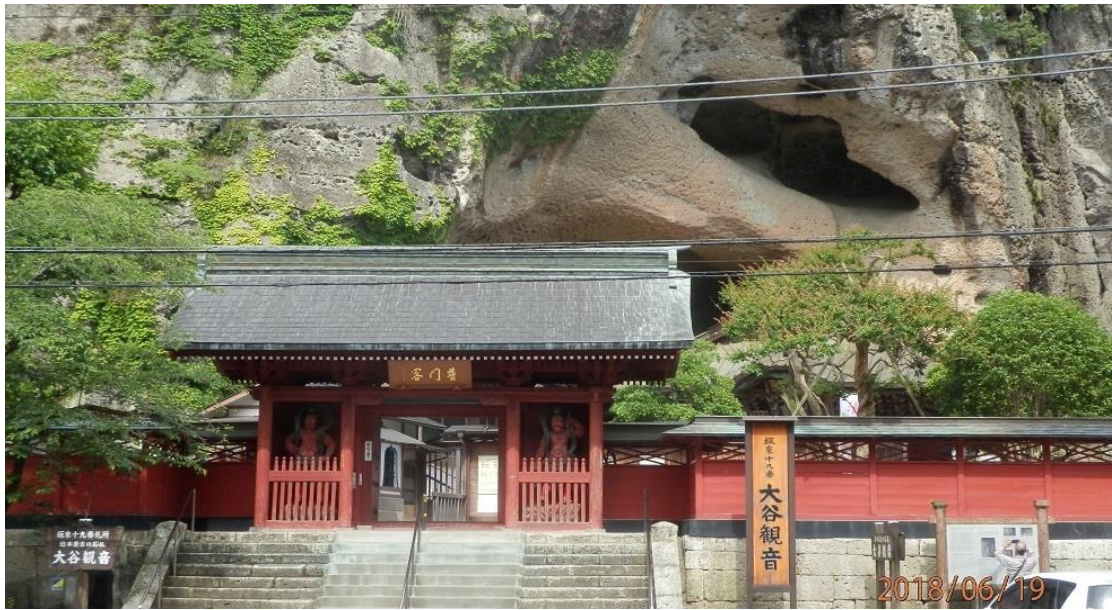
(中禅寺 観音堂)

【日光山 中禅寺】天台宗 本尊：十一面千手観世音菩薩

【詠歌】中禅寺 のぼりて拝む みずうみの うたの浜路に たつは白波



第十九番 天開山 大谷寺（大谷観音） （宇都宮市）



大谷観音は大谷石の産地で有名な宇都宮市郊外の山間の岩山にあった。大谷石の巨大な懸崖穴の中に造り込まれた小さな観音堂であったが、最近日本遺産に認定されたとかで結構参拝者が多かった。参拝者が何人か集まると係の女性が御堂の中を案内して、岩壁に彫られたご本尊や磨崖仏を説明してくれるというスタイルであった。拝観料 500 円也。

御本尊は岩壁に彫られた千手観世音菩薩で日本最古の石仏といわれ、平安時代の作だそうで、風化が相当激しいようであったが、4 尺に及ぶ石像は圧倒的な存在感と靈験が感じられた。

弘法大師作との伝承があるそうだが、これだけの巨大な石仏を完成させるには何年間も掛かったことであろうから、とても弘法大師が巡行の序に彫ったとは考えられない。

バーミヤン石仏との共通点が見られることから、実際はアフガニスタンからの来日僧が彫刻したのではないかとの説が有力らしい。何とも壮大な浪漫ではないか。



また、同じ洞窟の脇堂には釈迦三尊、薬師三尊、阿弥陀三尊の石仏も彫られていた。これらの磨崖仏は、大分県の臼杵磨崖仏と比肩されるもので、西の臼杵に対して「東の磨崖仏」と並び称されているそうだ。



(脇堂の石仏群)

この寺の御詠歌は、「名を聞くも めぐみ大谷の 観世音 みちびきたまへ 知るも知らぬも」というものであるが、これは説明を聞かないと趣意が分からない。むかしむかし大昔、三河の国に貧しい百姓があった。貧しいながらも息子にも恵まれ家族3人幸せに暮らしていたが、子供が3歳の時に父親は貢役に取られて鎌倉に下り、何年か後にそこで知り合った女と女の故郷の下野ノ國しもつけに行つて暮らすようになった。それとは知らぬ三河の国の母子は父の帰りを待ちわびて日々を過ごしていたが、ほどなく母親は病で身罷り、幼い子供は独り残されて餓鬼（幼い乞食）となったが、何とか父親と逢いたいものと毎日毎日鎮守に参つてお願いをしていた。或る晩観音様が夢枕に現れて「下野ノ國、宇都宮の大谷観音に祈願すれば父親と逢えるであろう」とのお告げがあった。子供は乞食をしながら下野ノ國の大谷観音に辿り着き、昼は乞食で飢えを凌ぎ、夜は観音堂の前で観音様の名を一心に唱えることを続けている内に、再び観音様が僧に化身して夢に現れて「参詣する人々のいちいちの名前と国の名を聞き尋ねれば、やがて尋ねる父親に逢えるであろう」と告げられた。子供は毎日毎日僧の言われたままに参詣者の名前と国を尋ね続けた。

ある年の暮に三度観音様が夢に現れて、明日の初参りの人の中に父親が居るであろうと告げられた。子供は喜んで人混みの門前に座っていると、子供の足元で躓いて倒れた人があった。名を聞き国を聞いて、顔はお互い分からぬながら、それが我が父・我が子であった。二人は抱き合つて感涙に咽び、観音様の御導きで再会できたことを感謝しつつ香花を供養して二人で生まれ故郷の三河に戻つて行つたという、その情景を詠ったのがこの詠歌である。

お寺の詠歌なるものは、薄っぺらい観光地のキャッチ・コピーの域を出ない物が多いが、これはちょっと泣かせるではないか。

さて、この大谷の辺りは大谷石の洞窟などが多いせいか、大昔から人類が住んでいたのであろう。寺の宝物館にはこの寺の本堂下から出土した縄文人骨が展示されていた。11,000年前の縄文最古の人骨だそうだ。



この骸骨でちょっと気持ちが悪くなったので、気持ちの良い新しい観音様の仏像を見よう。寺のすぐ隣の昔の大谷石の石切り場跡に高さ 27 尺の大きな石仏が立っている。世界の平和を願って昭和 20 年に造られた平和観音で、岩山をそのまま切り彫ったものである。東京芸大の教授のデザインをもとに、地元大谷石の石工達が 6 年間掛けて彫り込んだものだそうだ。清々しい顔が何とも言えない。

案内役の大谷観音の寺女も、大谷寺には二つの石刻観音菩薩がおられて、一つは磨崖の千手観音、もう一つはこの平和観であると自慢げであった。この平和観がある広場は気持ちの良い大きな石の公園になっていた。大谷公園。



(大谷公園と平和観音)

帰途は、バスで JR 宇都宮駅に戻り、駅前の「どっこいしょ」という汚い酒場で喉を潤した。ご老体の店のオヤジさんと話が弾んだ。

※本稿の千手観音、脇堂石仏、縄文人骨は大谷寺 HP から引用した



【天開山 大谷寺】天台宗 本尊：千手観世音菩薩

【御詠歌】名を聞くも めぐみ大谷の 観世音 みちびきたまへ 知るも知らぬも

(参詣日：2018/06/19)



第二十番 独鈷山 普門院 西明寺（益子観音） （栃木県益子町）



この寺のHPを開くと、まず「普門」という字が達筆な毛筆で流れるように描き出される。普門とは、衆生の全ての苦しみを分け隔てなく普く^{あまね}掬い上げる広き門という意味だそうで、この寺の院号でもあるが、このキャッチタイトルはなかなかイカしている。この寺の住職は著名なガン専門医でもあり、またターミナルケアにも造詣が深く、境内に医院と介護老人ホームも開設されて病者の救済に尽力されている仁者だそうだから、このタイトルももっともなことであろう。現代の赤ひげ先生であろうか。

それにしても、益子は遠い。この日は朝5時に自宅を出てから先に第17番満願寺を巡ってから、バス、JR水戸線、ローカル線の真岡鉄道、更にタクシーを乗り継いでこの寺に来たので、寺に着いた時は閉門ぎりぎりの時刻であった。

開基は行基菩薩。都から移封されて来た紀貫之の後裔によって建立され、往時は一山12坊の繁栄を誇ったが、兵火により焼失、以降何回かの復興・災厄を経て現在に至っているが、独鈷山の中腹に切り拓かれた境内は広く、また、茅葺の楼門、閻魔堂、鐘楼なども由緒ありそうな室町期の伽藍であった。本堂に掲げられていた扁額の寺号の文字にも趣があった。（右写真の寺号「西明寺」）



ここの本堂内陣には、鎌倉期の木彫六観音などが祀られていて、拝観料300円で自由に拝観できる。本堂外陣の格子戸を自分で開けて本堂に入り、更にもう一つの板戸を開けて内陣に入るのであるが、誰も居ない暗い内陣にはずらりと観音様が並んでいて、脛に傷を持つ身にはちょっと怖かった。観音様は衆生の苦しみを観・聴き済度して下さるのが本来の姿であろうが、

そのお姿が怖く見えるようでは、未だ未だ修業が足らん。オン マカ キャロニカ ソワカ。



(本堂の鎌倉期木彫観音像など、中央は十一面観世音菩薩御前立)

境内には茅葺の質素な閻魔堂があった。質素ではあるが何か風格を感じさせる御堂であった。その中には閻魔様が住んでおられた。普通は閻魔大王は怖い顔をしているが、ここの閻魔様は笑っておられる珍しい笑い閻魔であった。

(閻魔堂⇒)



(笑い閻魔)



(中央：閻魔大王、左：悪童子、右：善童子、右奥：地藏菩薩、左奥：脱衣婆)

閻魔大王は実は此岸の地藏菩薩が姿を変えて彼岸に出張されている訳で、地藏菩薩は優しいお顔をしてお衆の苦しみ・悩みを肩代わりしてくれていることから、この化身である閻魔大王も笑ってお衆を助けてくれているのだそう。前世の因縁も悪く、また今世でも悪行の限りを尽くしてきたワタシ奴は閻魔大王のお裁きでは魔羅吊りの刑か、軽くても舌吊りの刑を免れまいが、できればこの笑い閻魔サマに裁判をして頂きたいものだ。左様なことを考えながら、寺から益子駅まで1時間ほど歩いて帰った。田植が済んだばかりのみずみずしい田圃の中の静かな一本道であった。

【独鈷山 普門院 西明寺】真言宗 本尊：十一面観世音菩薩

【詠歌】西明寺 ちかひをここに 尋ねれば ついのすみかは 西とこそきけ





寺の立地の並みではない山中の辺地と言ひ、またそこまでのアプローチの悪さと言ひ、また廃寺のような寂しい境内の佇まいと言ひ、これは「天下絶品」であつた。坂東三十三観音霊場のみならず、四国遍路八十八ヶ所でも、山中にポツンと建っているこのような寂寺はちょっと珍しいのではなからうか。

境内には、小さな本堂（上写真、左）と倉庫のような庫裏があるだけで山門も無かつた。本堂の横には、上写真右のような小さな廃屋（？）が建っていて、これはかつてこの寺が隆盛を極めていた頃の間口 18 間の大本堂が明治時代の山火事で焼失しその後建てられた小さな仮本堂であるそうだが、破れた格子戸といい、ビッシリと貼られて破れ果てて字も消えてしまった納め札といい、何やらこの寺の侘しさを現しているようだったが、そこに掲げられている鰐口は古色泰然として由緒ありそうなものだった。それに比べて左側の再建された新しい本堂は何やら安普請の感を拭えず、かつての由緒ある古刹のイメージとはいかにもチグハグな感じがした。

寺伝によれば、この寺は白鳳時代に役小角が創建し、その後落剥していた寺を弘法大師が自ら刻んだ十一面観世音菩薩を本尊として再興、平安時代から鎌倉時代に掛けては修験の寺として栄え、鎌倉の代に坂東三十三観音霊場第二十一番札所となつて、水戸光圀も護寺の援助を惜しまなかつたそうだが、今は上のような有様であつた。

それにしても、今でも周囲 2 里の内には集落も民家も一軒も無い奥深い山中の辺境、まして寺が創建された奈良時代では人里から更に離れた誰も住まぬ山奥のこの幽地に、何故にかつては大伽藍であつた寺坊が設けられたのであろうか。修験の寺であつたにしても、もう少し里に近い場所に造営されているのが普通であらうから、不思議な気がするのである。

さて、この寺は坂東 33 観音札所の中では最も北端にある寺で、^{ひたち}常陸ノ國・^{しもつけ}下野ノ國・^{いわき}磐城ノ國 3 國國境（茨城県・栃木県・福島県の県境）の辺境「八溝山」に位置し、往時から坂東三十三観音霊場巡礼の最難路と言われている寺であるので、私の「坂東三十三観音霊場」巡礼の結願の寺（巡礼の最後に詣でる寺、満願成就の寺の意）として最後に残しておいた寺であつた（通例の巡礼の順番では、千葉県館山市にある第 33 番「那古寺」が結願寺になっている）。

この日輪寺は最北端の“最難路”と言われるだけあつて、JR 水群線という水戸～郡山を結ぶ超田舎路線で水戸から 1 時間半の常陸大子駅まで行き、更に超過疎路線バスに乗り換えて約 1 時間の「蛇穴」という山中のバス終点から山道を徒歩で 2～3 時間登らなければならない辺鄙な場所であつた。

初回は、この夏の7月末の高温注意報が出ている日に出掛けたが、林道の途中からこの寺に入る山道を間違えて八溝山の山頂近くまで入ってしまい、山中でロストポジションになってしまってウロウロと山中を彷徨った挙句、結局寺には辿り着けずに、蛇穴発 17 時の終バスに間に合わせるためにやむなく急いで下山したのであった。6 時間のハイキングであったが、猛暑の中で熱中症で死にそうになった。人っ子一人通らない山中で、誰かに道を尋ねる訳にもいかず、全く往生した。

(林道から分かれて寺に行く山道が非常に分かりにくいので、歩いて巡る方々のためにご参考までに稿末にこの山道巡礼コースの案内を掲げておいた)

さて、そのリベンジとして、暑さが多少緩んできた 8 月下旬に再びこの寺に向かった。今度は事前に寺に電話で道を聞いておいたので、道を間違えることなく蛇穴バス停からストレートに到着できた。

蛇穴バス停(バス停といってもバスの方向転換スペースがあるだけの山中で、そのバスも日に 2 本しかない)ので、次のバス、即ち終バスに乗り遅れるともう打つ手がない。タクシーを呼べば最寄りの常陸大子駅まで 1 万円だそうだが、携帯電話も通じないようだった)の傍に八溝山登山口の四阿があって、その水場で手拭をタププリ水で濡らして水冷式盗人類冠りをしてウネウネとした林道を登り始めた。

今年の夏は平年より 20 日余りも早く 6 月末に梅雨が明けて、7 月以降は観測開始以来初めてという記録的な猛暑となったが、8 月のお盆過ぎには暫時ではあるが大陸にあった前線が太平洋まで南下して大陸の涼しい秋の風を日本列島まで運んで来たので、再度日輪寺に登った今日はこの八溝山には乾いた爽やかな涼風が吹いていて、ルンルン気分で奥久慈県立自然公園の景色を楽しみながら登る余裕があった。



(奥久慈県立自然公園の山並み)



(このような森林浴の中を歩く)

日輪寺までの林道や山道では、車一台、人っ子一人にも遇わなかった。台風が近ずいていたためか、時々樹林帯の上をゴーッという松籟の風が吹き過ぎて、野分の時のような淋しい気色になったので、昔どこかで親しんだような気がする植木等か誰だったかの「♪ドンと、ドンとドンと、いきましょう♪」という一節を大音声で唸りながら歩いた。八溝山の天狗サマも風神雷神さまも何が来たかときっと吃驚されたに違いない。

蛇穴バス停からウネウネと林道を登り、途中から山道に入って沢のドンヅマリまで下り、そこから丸太棒で土止めが作ってある歩き難い山道を登って行くと舗装された道路に出た。そこが今回の結願の寺、八溝山日輪寺であった。林道と山道の 2 時間半ばかりの森林浴であった。

伽藍は上に書いたとおり小さな本堂しかなく、他には観るべき所も無かったが、白衣、輪袈裟、金剛杖、菅笠に正装して本堂でご本尊十一面観世音菩薩のご真言「おん・まか・きやろにきや・そわか」を

唱え、般若心經一卷を読誦して札を納め、この寺で坂東三十三観音霊場巡礼を結願したのであった。

実は境内から 1.5km ほど登れば八溝山の頂上で、頂上には八溝嶺神社がましましており、また、常陸・下野・磐城三國が望める絶景の地であるそうだが、ここ迄足を伸ばすと常陸大子駅に戻る最終バスに間に合わなくなるので、これは諦めた。

寺の四阿にボケ〜ッと座っていたら、寺男が来て「早く降りないと終バスに間に合わなくなるよ」と注意してくれた。復路は往路とは別の道を下ることになっていたが、こちらは往路より少し長いが全て舗装道路の下り道と聞いていたので2時間もあれば充分と高を括っていたのだが、これが間違いであった。

下りの道路は県道 248 号という舗装道路で、谷底を這うようにウネウネと下る道であるから眺望も全く得られず、固い舗装道に足が草臥れた。それでも道の端にはススキが秋風に揺れ、虫のすだきも聞こえて来て、ここはもう秋の気配であった。終バスまでは未だ時間がタツプリあると踏んでいたものだから、ノンビリと下って行ったのであるが、いつまで歩いても集落が全く出てこないし、人里に近づいた気配が全く無い山中であった。ひょっとしてどこかで道を間違えたのではないかと不安になってきた。行きかう車は一台も無いから道を聞くこともできない。しかし、道は一本道で分岐などは無かったから、この道を辿るしかない。ア〜ア、マイッタなあ〜。

終バスに間にあわなければタクシーを呼ぶしかないが、さすれば深澤諭吉先生 1 枚と常陸大子駅前酒

亭での般若湯を頂戴する時間が無くなってしまう。これはもう走るしかない。足が吊ってきた。もう無我夢中で走り下って行きながらひょいっと川向うを見ると古びた鳥居があった。社は見当たらず小さな石祠があるだけであったが、これはそろそろ人里に近いのではあるまいか。石祠には大山祇神社と彫られていた。大山祇神社というのは、四国今治の大三島

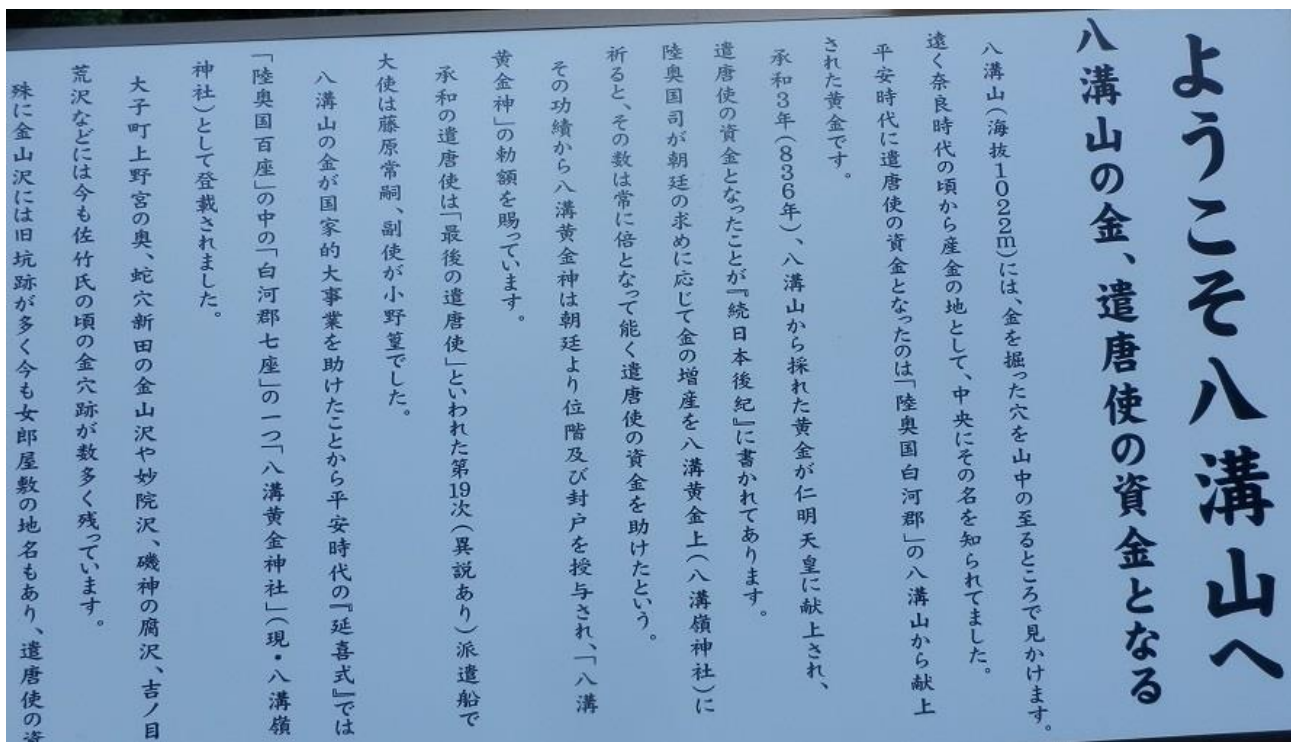
に本家本元がある山の神・海の神・戦^{いくさ}の神を祀る神社で、全国に末社が勧進されている古い社である。この辺りは深い山中なので山の神を祀ったか、或いは東国武将が戦の神を勧進したのであろう。

走った甲斐があつて、間もなく大きな道路に出た。集落や民家は無かったが、ここがバス停であった。寺から休まず2時間歩き続けて何とかギリギリで終バスに間にあった。

ここには、次ページの標識が掲げられており、この辺りは奈良時代から金鉱として知られていて、往時の金鉱を掘った穴が今でも沢山残っているそうだ。

常陸大子駅前の魚兼という呑み屋で般若湯一献。





【八溝山 日輪寺】 天台宗 本尊：十一面観世音菩薩

【ご詠歌】 迷ふ身が 今は八溝へ 詣りきて 仏のひかり 山もかがやく

(参詣日 2018.08.17)



《ご参考》

この寺へのアルキ道が分かりにくいので、歩いて巡礼される方のご参考までに順路を記しておく。

(1)「蛇穴」バス停から 200m 程先右側に大きな鳥居 (八溝嶺神社) がある。鳥居を潜って林道へ入る。

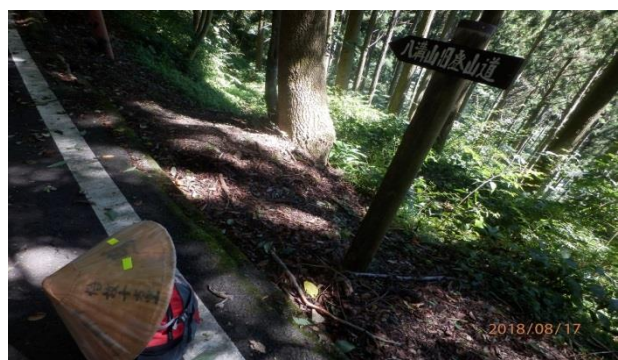


(路線バスの終点「蛇穴」バス停)



(バス停から 200m 先の鳥居、ここを右に入る)

(2) ウネウネした林道を登る。途中に「八溝山旧登山道」という標識がところどころに出て来るが、これは直ぐに獣道程度の藪になるので、よほど藪漕ぎが好きな人以外は踏み込まず、林道を歩いた方がよい。



- (3) この鳥居から林道を 1 時間半程度登ると、下左のような駐車場の屋根が見えてくる。この駐車場の手前 150m 位の所に下右のような標識があるので、そこを右の山道に入る。「八溝山遊歩道」、「日輪寺入口（森林浴コース）」「山頂まで 2.5km、日輪寺まで 1.2km」の 3 つの標識が建っている。この駐車場の先 250m にも「旧参道入り口」の標識が出ているが、ここは日輪寺への道ではなく、金性水を経て直接八溝山に直行する道であるので、入ってはいけない（私は初回は間違っこの道に入り、ロスト・ポジション&時間切れで途中で引き返した苦い経験がある）。



- (4) 「日輪寺入口」を右に入ると、やがて山道がマナイタ沢の谷底に下るようになってくる。初回の折には、このような谷底に寺院が有る筈は無いと思い、途中で引き返して上の駐車場迄戻り、日輪寺への正しい山道が別にある筈だと探し回った挙句、上のような「旧参道入り口」の標識に騙されてそちらに入って往生した。

この谷底に下る山道が正解で、沢のドンヅマリに突き当たると道は沢を渡って左岸に移り山腹をトラバースしながら登り道となる。沢を渡るドンヅマリには石橋と貯水池のような積み石の残骸があり、また多少見にくい「日輪寺まで 0.7 キロ」の標識とベンチがある（下写真）。



ここを過ぎると、道は丸太棒で土止めされた急坂の山道となり、林道「日輪寺入口」から約 20～30 分で寺に着く。

余談であるが、復路は私は県道 248 号を下ったが、この道は上にも書いたように眺望も無く、オマケに往路の林道経由よりも長いので、復路も往路と同じ林道を探るほうがよい。

なお、ルート図は下記を参照されたい（大子町観光協会）。

<http://www.daigo-kanko.jp/wp-content/uploads/2008/08/c6049b1c81207c680634efd2fdb77915.pdf>

第二十二番 妙福山 明音院 佐竹寺（北向観音） （茨城県常陸太田市）



坂東 33 観音札所の内、拙宅から一番遠い札所が茨城県北部にあるこの寺と、更にもう少し北に行った茨城・福島県境の八溝山にある第 22 番札所「日輪寺」の 2 ケ寺である。よって、この 2 ケ寺が最後まで残った。後者の日輪寺は、日に 2 本しかない路線バスの最寄りのバス停からでも集落や民家の全く無い山道を往復 5 時間ほど歩かなくてはならない無住の山寺だそうだから、この山寺の方が坂東 33 観音詣の結願寺に相応しかろうと先にこの佐竹寺を済ますことにして出掛けた。

今年の夏は災害級と言われる記録的な猛暑。水戸から JR 水郡線の分岐終点「常陸太田駅」に着くと気温 36 度の猛暑の中、舗装道路上は 40 度以上にもなっていたのではないかな。寺は駅から徒歩で小 1 時間の所にあり、道は日蔭が全く無い登り道だそう。これでは熱射病で救急車のお世話になるのがオチであるが、さりとてタクシーを使うのも癪だし、そうかといって“年寄りの冷や水、後期高齢者猛暑の観音詣で救急搬送、記録的高温予報が出ている時に非常識極まる”と TV で放映されるのも癪である。

マ、昼食でも喰いながら考えるかと駅前中華料理店に入ってウダウダと生ビールを飲みながら先延ばしに時間を稼いでいたが、往きだけはタクシーを奮発し、帰りは稲田を吹き渡る涼しい風にでも吹かれながら田圃の中の畦道でも帰るかと思いを上げた。

佐竹寺は、本堂は桃山時代初期の重厚な寺院建築で、なるほど茅葺の厚い屋根や柱や木組の結構はなかなかの貫録であった。また、丸窓や火頭窓は当時の寺院建築としては珍しいものだそう。しかし、その他には観るべき御堂も何も無く、また折から団体バスツアーも入っていたので早々に退散した。

今迄の坂東観音詣では滅多に団体巡礼ツアー客と一緒にすることは無かったが、久しぶりに十数名のツアーと鉢合わせになり、納経も彼らの納経でかなり待たされた。日蔭の無い炎天下で待たされたので、本当に熱中症になりそうであった。

帰りは歩いて帰ったが、稲田を渡る涼風も吹かず、日に何本も無い電車に間に合わせるために早足で歩いたので、帰途も熱中症で倒れそうになった。手拭で首に巻いた保冷剤は 5 分間と保た^もなかった。



(珍しい丸窓と火頭窓 [左端])



(所構わず夥しく貼られていた千社札)

【妙福山 明音院 佐竹寺】真言宗豊山派 本尊：十一面観世音菩薩

【御詠歌】ひとふしに 千代をこめたる 佐竹寺 かすみぐれに 見ゆるむらまつ

(参詣日 2018/07/22)



第二十三番 佐白山 正福寺（佐白観音）

（茨城県笠間市）

茨城県土浦市の第26番「清瀧寺」に詣った後、JR常磐線で水戸の手前の友部まで行き、そこで水戸線に乗り換えて笠間駅まで行った。笠間という所は水戸のすぐ西隣に位置する丘陵の田園地帯であるが、線路沿いには諸処に〇〇窯などという看板が立っていた。この辺は笠間焼で有名な陶器の産地であろう。

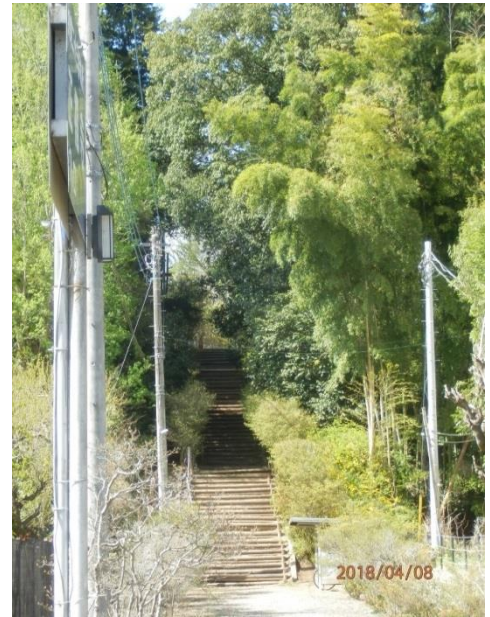
さて、この寺も鄙の寺であった。寺の門前には大きな美術館（日動美術館）があり、また、少し下がった所には菊人形で有名な「笠間稻荷神社」があって、その門前通りには神社詣での旅館や土産物屋が並んでいる賑やかな笠間稻荷門前町であるから、この寺は坂東33観音札所とはいえ、それらの陰に翳^{かす}んでいるのかも知れない。

その鄙の入り口の木製の階段を上って行くと、ちょっとした平地があって、そこが境内であった。由緒は古いそうだが、本堂も庫裏を兼ねているような余りパツとしない伽藍だった。

寺のHPによれば、寺伝の由緒書きに新しい解釈が発見できたので、寺の縁起を書きかえるそうだから、由緒を更に優位に補強するのであろう。マ、どこの寺でも同様であるが、大凡、縁起などと言うシロモノは後付けの我田引水であろうから、どっちに転んでも大した違いはなかろう（失礼。このように考える者は信仰心が無いので、済度されないところが哀しいところである。“信ずる者のみが救われる”）

ここの本尊は十一面千手観世音菩薩であるが、寺のPRによれば「髪の毛筋などが端正にしあげられている端麗な面長の顔で中央の仏師の作と伝えられている鎌倉時代初期の秀作であり、京都三十三間堂に祀られている湛慶作の観世音菩薩像に酷似している」と謳ってある。

拝観料が1500円もしたので、帰宅してから寺のHPに載っていたご尊顔を拝顔してお茶を濁したが、なるほど端正なお顔であった。



（寺の入り口）



境内には右のような石碑もあった。このお寺とどのような関係があるのかは知らないが、“馬車組合”が泣かせるではないか。

余談であるが、茨城県の33観音6寺のうち、福島県境に近い一番北側の日輪寺を除く5寺は全て真言宗豊山派の寺である。何の縁であろうか。この5山は筑波山の山麓に並んでいるので、或いは筑波山の縁であろうか。

帰途、常磐線の柏駅で途中下車して、会社で同僚だった同所在住の清水さんと一献傾けた。



【佐白山 正福寺（佐白観音）】真言宗豊山派 本尊：十一面千手観世音菩薩

【御詠歌】夢の世に ねむりもさむる 佐白山 たえなる法や ひびく松風

（参詣日 2018/04/08）



第二十四番 雨引山 樂法寺（雨引観音） （茨城県桜川市）



この寺は、天平時代聖武天皇が妃・光明皇后の安産を祈願して法華經を書写して奉納し安産を祈念したところ功驗あらたかであったので、当山を安産祈願の根本道場と定めて勅願寺としたという由緒から、安産・子育て祈願の観音様として往古から有名だそうで、折から日曜日であったこともあって、境内は生まれたばかりの赤子を抱いたお礼参りや子供を連れた夫婦連れや家族で賑わっていた。



（光明皇后安産の図）

奈良の都に居た聖武天皇が遥か東国の鄙にある常陸ノ國のこの寺まで祈願の供奉をしたというのも眉唾ではあるが・・・。

本堂も子育ての祈祷を受ける人しか入れないシステムになっているようだったので、御本尊の延命観世音菩薩のお姿は拝めなかった。幽邃なお寺にも趣があるが、逆に楽しいことで賑わっているお寺もいろいろな参詣者を眺めていると、眺めている方もそれなりに楽しいものである。

この寺の境内には河津桜が沢山植えられていて、チラホラと蕾がほころび始めていた。目の前には春霞に霞んではいたが筑波山が大きなシルエットになって浮かんでいた。ベンチに座って筑波山を眺めていると孔雀が寄って来た。境内では孔雀を放し飼いにしているようで、人によく慣れていた。

この寺には、土・日・祝日に限り、JR 水戸線・岩瀬駅から市営バスが出ていて、歩けば2時間くらい掛かる山中のお寺までたったの200円で運んでくれるのが有り難い。参詣者は皆マイカーで来るようで、バスに乗っていたのは私も含めて2人だけだった。



（観音堂の見事な彫刻。江戸の著名な仏師、無閑堂円哲の刻）



（多宝塔も見事である）



（仁王門）



(阿の仁王像)



(仁王門の天井の龍)



(中央左 春霞に霞んだ筑波山)

【雨引山楽法寺（雨引観音）】 真言宗豊山派 本尊：延命観世音菩薩
 【ご詠歌】 詠歌：へだてなき 誓をたれも 仰ぐべし 佛の道に 雨引の寺

(参詣日 2018/03/04)



第二十五番 筑波山 大御堂 (茨城県つくば市)

JR 常磐線土浦駅から関東鉄道バスで筑波山口まで行き、そこでバスを乗り換えて筑波山の観光基地&筑波神社の門前町になっている筑波神社入り口まで登った。家を出てから電車とバス乗り継ぎで片道5時間の遠路であった。この門前町には筑波神社の真っ赤な大鳥居が鎮座ましましていて、神社への案内板は至る所にあったが、これから訪ねる坂東第24番観音「筑波山大御堂」の案内版はどこにもなかった。マ、筑波山は筑波神社の御神体になっているそうだから、ここでは仏様より神様の方が圧倒的に人気が高いのかも知れない。

さて、観光案内所で道順を訪ねた大御堂をめざして筑波山の中腹を少し登ってみたが、どこにも仏閣らしきものはありそうになかった。途中で作務衣を着た寺女らしい人が、この寺は只今伽藍の建て替え工事中で本堂は下のバラック小屋に仮住まいしているのだと教えてくれた。なるほど、ブルドーザーが入って整地中の土地が昔の境内らしかった。彼女の言によれば、完成は2年先のことだそうだ。



(只今伽藍立て替え中。右に鐘楼だけが残っている。

後ろの山は筑波山。左が男体山、右が女体山)



(バラック仮住まいの本堂。

御本尊は写真が祀られていた)

納経の僧は尼僧であった。先程の寺女が朱印を押し、その上にこの尼僧が筆を執った。丁寧な人で、納経帳に合掌してこの寺のご本尊千手観世音菩薩の御真言を3回唱えられた。オン バサラ タラマキリク。大寺では機械的に書き流すだけである。納経を終えて仮本堂の前で筑波山を仰ぎ見た。境内にはソメイヨシノが満開で、中腹には山桜もピンク色に染まっていた。尼僧の話では、江戸時代までは筑波山全山が大御堂の伽藍であって、広大な寺領を有する大寺院であったが、廃仏毀釈によって今は隣の神社の方が威張っていることが癪のタネのような口吻であった。神仏の世界もなかなか大変らしい。

門前町のバス停の前の食堂でバス待ちの間に、足下に霞んで広がる関東平野の展望や里山の満開の桜を見ながら缶ビールと筑波名物蒟蒻の味噌田楽を頂戴した。

かつて、40年程前に中央官庁の研究機関が筑波研究学園都市に揃って移転し、中央官庁のシステム営業を担当していた小生はよく土浦に行ったものだが、土浦駅には当時の俵は全く無かった。ウロウロと歩き回って裏通りの安酒場に入り、往時の仕事のことなどを思い出しながら独りで盃を傾けた。

【筑波山 大御堂】 真言宗豊山派 本尊：十一面千手観世音菩薩

【御詠歌】大御堂 かねは筑波の 峯にたて かた夕暮れに くにごこひしき



第二十六番 南明山 慈眼院 清瀧寺（清瀧観音）（茨城県土浦市）

前回、上で書いた 25 番筑波山大御堂に参った折に、帰途筑波山口から土浦方面への路線バスで途中の「さん・あぴお」とかいうスーパー前のバス停で降りて、ここで新治村営コミュニティ・バスなるもの（^{にいはり}）に乗り換えれば山奥のこの山寺前までバスで行けるということだったので、スーパー前でバスを降りて乗り換えのバス停を探してみたが、そのようなバス停はどこにも見当たらなかった。スーパーと言っても田圃の中にボツンとあるような田舎スーパーだからお客の人影はほとんど見えず、従がって通りがかりの誰かに聞くということもできず、また暇そうにしている店員にも聞いてみたが、彼等は通いの店員で当地の地理には疎かったのでサッパリ要領を得なかった。

そのような次第でウロウロと小 1 時間ほども広い敷地の中を探し回って草臥れきったところに、軽トラで来た人がそのバスならもう何年も前に廃止になっていると教えてくれた。事前に土浦市役所の HP で「にいはりバス」で検索すると出て来たので、まさか廃止になっているとは夢にも思わなかったが、市役所の HP 更新ができていなかったか、昔の記事が残っていたのであろう。かようなこともあるのだ。

仕方がないので、この時は大御堂 1 寺だけの参詣で諦めて帰ったが、何とも残念であったので、その週の週末に再び土浦方面に出掛けて、前回積み残したこの寺と、同じく茨城県内の笠間市にある第 23 番「正福寺（佐白観音）」の二つに参詣した。

さて。

コミュニティ・バスが無くなった現在、上記の路線バスのスーパー前の停留所から歩けば 2 時間は掛かるそうである。1 週間前はこの付近の街道は桜の満開であったが、今日は桜吹雪に吹かれながら筑波山山麓の田圃の中のノンビリした一本道をトコトコ歩くのも悪くないナと思ったりもしたが、昨年夏骨折した腰椎骨折の回復がイマイチで腰痛が退かず、平地でも連続では 30 分ほどしか歩けないのでバス停からタクシーを奮発しようとしたが、今回も思わぬトラブルがった。



（清瀧寺に向かう田舎道。中央奥の山麓に清瀧寺。手前は、かつて寺が隆盛であった頃の諸処の標石や丁石を一所に祀ったものか？）

実は、この付近にタクシー会社が無いかとネットで調べると、土浦からの幹線バス路線からこの寺の方向に分岐する道路際に一軒だけタクシー会社があることが分かった。それで、そのタクシー会社の看板が見えたのでバスを降りて行ってみると何ともぬけの殻。廃業したらしい。田舎の田圃の中でどうする術も無かったが、やっと土浦方面のタクシー会社を探してタクシーを呼び、何とかこの寺に辿りついた次第。マ、田舎に行けばこのようなことは普通のことであろうから、これからも注意せねばならぬ。

さて、この寺は、推古天皇朝の開基（607 年開基）の古刹で、かつては 7 堂大伽藍の大寺であったそうだが、江戸時代に焼失、その後再建された本堂も不審火で再び焼失、現在の残っているのは天保年間建立と言われる山門のみで、本堂は最近再建されたという鉄筋コンクリート製の小さな本堂であった。

唯一残っていた山門の朱塗りは剥落していたが、山門には年代を感じさせる幽玄な趣があった。山門の木造金剛力士の阿形像の方は、胎内に阿弥陀如来像を抱いているという珍しい金剛力士像であるそう。



(年代を感じさせる幽玄な清瀧寺山門)

(胎内に阿弥陀如来像を抱いている阿形仁王像⇒)



山門から少し石段の参道を登ると、山腹のちょっとした平坦地に出た。ここが伽藍であった。何回も焼けたという本堂が寂しいコンクリート製なのはやむを得ないが、境内の庫裏なども小屋の如き建物で、古刹にしては何とも侘しい佇まいであった。

今は無住で、寺の供養や納経、清掃などは地元の人がボランティアでやっているそうだ。坂東三十三観音のお寺になっているので、西国などの遠方から態々お参りに来られる人もあるので、当番を決めて毎日誰かが納経所に詰めているようにしているが、後継者も居ないので、殆ど毎日のお勤めになるそうだ。この寺が旦那寺であるかどうか知らないが、檀家があったとしても山麓は小さな集落であるから檀家の布施も無い廃寺に近いような貧乏寺を守っていくのは、単にご近所付き合いとしての義務意識からではなく、私奴^{わたしめ}などの想像も及ばぬような深い信仰心からではあるまいか。誠に有り難いことである。納経の合間に世間話を少ししたが、何かそのような奥ゆかしい趣が感じられた。



(手前の桜は春爛漫だが、何やら淋しげな境内)



(本堂の火事で焼けて炭化した木造の獅子像)

【南明山 慈眼院 清瀧寺】 真言宗豊山派 本尊：聖観世音菩薩

【御詠歌】わが心 今より後は にごらじな 清瀧寺へ 詣る身なれば

(参詣日 2018/04/08)



第二十七番 飯沼山 円福寺（飯沼観音）

この寺は銚子市街地のド真ん中にあった。山門も本堂も五重塔も派手な朱で塗られていて些か落ち着きのない風情であった。もっとも、かつての由緒ある伽藍は太平洋戦争の空襲で全て焼かれてしまい、現在の伽藍は戦後の改築だそうだからこれも致し方ないことであろう。また、街のド真ん中という立地も加勢しているのかも知れない。

坂東三十三霊場のうち、この寺の一つ手前は筑波山山麓の第26番・清瀧寺で土浦・佐原を経て100km、また次の霊場である成田の第28番・龍正院までは60km離れているので、昔の巡礼はどうしてもこの銚子に宿を取らねばならなかったそうで、そのため旅籠や遊興の門前町ができて、それが銚子という街の始まりであったらしい。

縁起によれば、弘法大師が弘仁年間（8百年頃）に巡錫した際に開基したそうで、そのために本堂の天井には四国88霊場の各寺の本尊を描いた絵が貼られていた。

本堂の隅にある納経所でご朱印を頂いている間に、どうぞ上がって内陣を拝んで下さいという有り難いお言葉。御本尊の十一面観世音菩薩は厨子の中に隠れておられたが、前立十一面観音が祀られていた。なかなか立派な内陣であった。

銚子と言えば醤油で有名な街であるので、写真のような供奉もあった。普通は般若湯などの菰樽の供奉物が多いが、なるほどここは醤油の町である。

銚子は関東地方最東端の地で、近くには大平洋の荒波が押し寄せる犬吠崎がある。滅多に行くこともないであろうから折角この地を訪れた機会に足を延ばしてみた。銚子電鉄と言う超田舎の2両電車で銚子から15分ほど。

人気が高いスポットなのであろう、沢山の人が来ていた。駅舎も欧州風のなかなかモダンな造りであった。



灯台が建っている岬の突端は公園になっていて、大平洋から押し寄せた大波が崖錐に当って砕け散る様子を飽かず眺めていた。海の向こうにはアメリカ大陸が見えた（ほど雄大な景色であった）。



（銚子電鉄「犬吠駅」）



（白亜の犬吠崎灯台）



（アメリカ大陸が霞んで見えた）

【飯沼山 円福寺】真言宗 本尊：十一面観世音菩薩

【御詠歌】このほどは よろずのことを 飯沼に きくもならはぬ 波の音かな



第二十八番 滑河山 龍正院 (滑河観音)^{なめがわ} (千葉県成田市)

成田から成田線で銚子方面に向かって二つ目の駅、滑河駅で降りて利根川沿いに広がる田圃の中の農道をトコトコと歩いて行った。

この付近は成田空港への着陸コースに当たっているらしく、いろいろな尾翼マークを付けた国際線の旅客機がひっきりなしに低空を通過して行くので、その尾翼マークからどこの航空会社かを当てながら歩くのも退屈しないで結構であった。

さて。この寺は成田近郊の平坦な市街地集落の中にありながら、何やら幽邃な感じがする境内であった。本堂は広大な



伽藍ではあったが、大きな伽藍につきもののキンピカではなくしつとりと落ち着いた建物で、観音堂に相応しい堂宇であった。また、境内には古びた銅造宝篋印塔が建っていたが、その古色蒼然とした美しい造形もこの寺の境内に静謐さをもたらしているのもであろう（上の写真の左の塔）。

納経所に行くと、上品な老婦人が受付に座っておられてご朱印を押され、庵主と思われる若い尼僧が筆を執られた。気品に満ちたその御尊顔は観世音菩薩の化身かとも思われ、仏教十惡の邪淫などの妄想が入り込む隙もない顔立ちであった。境内が綺麗に掃き清められていて清々しい感じがするのもこのような尼僧庵主の人柄によるものであろうか。

本尊は、一寸二分の十一面観音。一丈二尺の観音像の胎内に納められているそうだ。縁起によれば、“かつて当地は時ならぬ冷害にみまわれ、為に穀物は実らず人々は飢えに横たわるものが続出する有様であった。城主将治公はこの悲嘆を見聞され、金銭五穀を施し、更に観世音を念じられて法華經の読誦をなされたところ、結願の日に「朝日姫」と名乗る少女があらわれ、「汝の願いごとかなうべし」と小田川辺に案内して忽然と姿を消した。河中を見ると、一人の老僧が船を浮かべ、衣を網になしてひいたと思うや、小さな観音像をすくいあげて将治公に与え、「この湧より湧く水をなめよ」と教えて去った。そのお告げのとおりにし、尊像を奉持し堂宇を建てお祀りすると、気候も回復し、五穀も実り人々は蘇生の思いをしたという”。このすくい上げられた小さな観音像が御本尊の胎内仏である。ひょっとすれば、上の尼僧庵主はこの時の「朝日姫」の生まれ代りではなかろうか。

茅葺の仁王門は端麗でありながら重厚な趣があった。八脚門の柱は一見円柱に見えるがよく見ると十六角柱に削られている珍しいものだそう。

境内の片隅に集められていた沢山の宝篋印塔も由緒あるようなものばかりであった。





(端麗で重厚な仁王門)



(由緒ありそうな宝篋印塔)

帰りには乗り換えの成田駅で降りて、呼び出したパンチョ君と駅前の磯丸水産で一献傾けた。
1 週間前の慈恩寺観音の帰途の大宮での赤澤さんとの時と同様、気が付いたら6時間もやっていた。

【滑河山龍正寺（滑河観音）】天台宗 本尊：十一面観世音菩薩

【御詠歌】音にきく 滑河寺の 朝日ヶ渚 あみ衣にて すくふなりけり



第二十九番 海上山 ^{せんようじ}千葉寺 [千葉市]

千葉市のド真ん中にあった。
奈良時代創建の千葉市内最古の寺院だ
そうだが、その割には人気も無く、
伽藍も風情がなかった。

多少目を引いたのは、大銀杏と境内
の隅に建てられていた大きな宝篋印塔、
或いは「千葉笑」という立札だけであ
った。

大銀杏は 1300 年前の創建時に植えら
れたものと伝えられており、鎌倉八幡宮
の大銀杏（台風で倒れたが、倒れた根元
から子供が新しい芽を出している）より
も古いのだそう。



納経所の婦人（住職の家族？）も面倒くさ
そうに納経帳を受け取って愛想がなかった。

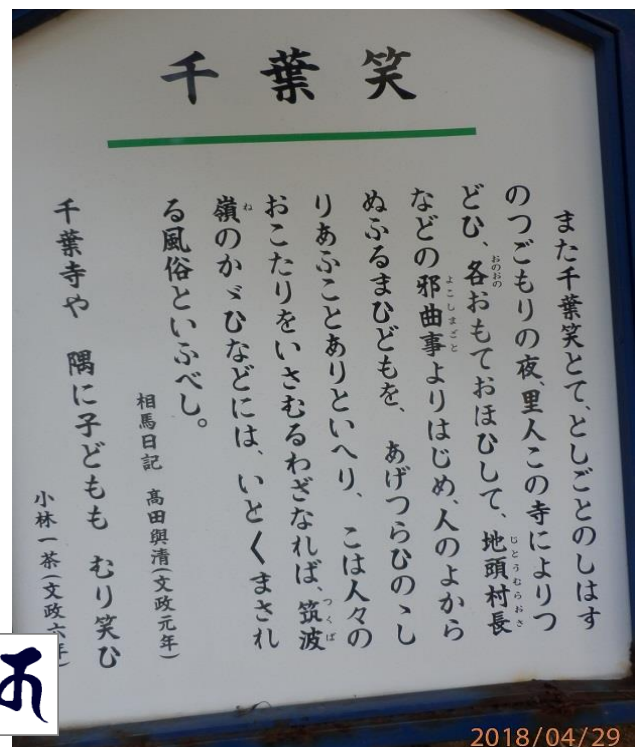
上空は成田空港の離着陸ルートになってい
るらしく、成田を離陸した旅客機がひっきり
なしに低空を通過して行った。

千葉駅に戻って、日本山岳会で同僚の千葉
在住の友人と一献。

【海上山 千葉寺】真言宗 本尊：十一面観世音

【御詠歌】千葉寺へ 詣る吾が身も たのもしや
岸うつ波に 船ぞうかぶる

— 63 — (参詣日 2018. 04. 29)





JR 内房線木更津駅から日に何本も無い路線バスで半時間、房総半島の片田舎の山中にこの寺はあった。周りには丘陵地を切り拓いたあちこちに「かずさアカデミア・パーク」なる研究開発団地？があったが、これも山の中であった。ここに勤めている人々の通勤の足や呑み屋などはどのようにするのか、他人事ながら心配になったような山中であった。バブルが弾ける前に作った団地であろうが、今は半ばシャッター団地の様相を呈してもいた。いずれも同じ秋の夕暮。

その研究開発団地のセンターからトコトコと半時間ほど登って行った所にこんもりとした鎮守の森があり、そこが第 30 番の高倉観音であった。

この寺の本堂（観音堂）は高床式の珍しい伽藍で、床下から丈二(3m60cm)の秘仏・正観世音菩薩のお姿を足元から頂まで拝むことが出来る仕掛になっており、同時に床下を利用して観音浄土巡り、地獄めぐり、胎内巡りなどの趣向も申しつらえてあったが（右写真）、残念ながら閉館の時間だったので、見えなかった。マ、入り口に座っておられる閻魔サマに舌を抜かれるのがオチだろうから、見ぬが仏かもしれなかった。



納経所のオバサンの対応もなかなかによろしかった。帰路は東京湾アクアラインで横浜に戻った。

【平野山 高蔵寺】真言宗 本尊：正（聖）観世音菩薩

【御詠歌】はるばると 登りて拝む 高倉や 富士にうつろう 阿婆婆なるらん



第三十一番 大悲山 笠森寺（笠森観音）〔千葉県長生郡〕



笠森観音は、房総半島の中央部、茂原からバスで小一時間の辺鄙な田園風景の中にあるが、鄙の地にもかかわらず多数の参拝客で賑わっていた。本堂に登る階段は押すな押すなの行列になっていた。本堂の中にある納経所も納経帳を一旦預けて後で番号札と引き換えに戻して貰うというシステムになっていたの、拝観後納経帳を返却して貰うのを忘れて階段を下りてしまい、山門迄下った所で思い出して、またまた再びキツイ階段を登り返す羽目になった。

この寺は「四方懸造り」と言われる本邦唯一の懸崖伽藍だそうで、これを目当てにした観光バスの立ち寄りスポットにもなっているらしく、ガイド嬢に連れられた団体客も多かった。

200 円払って拝ませて頂いた十一面観音の御本尊も、押すな押すなの盛況でご尊顔を拝する余裕も無かった。

本堂（観音堂）は崖の天辺に建っている回廊造りなので、グルリと一周すると房総の山並みが眼下に見えて眺望が良かった。

境内にはアイスクリームや鯛焼きの露店、人相見の出店などもあって、大繁盛であった。山門の横には、右の写真のような芭蕉の句碑もあった。

【大悲山 笠森寺】天台宗 本尊：十一面観世音菩薩

【御詠歌】日はくるる 雨はふる野の 道すがら
かかる旅路を たのむかさもり

（参詣日 2018. 04. 29）



（懸崖造りの本堂から伽藍を足下に。足が震えた）



第三十二番 音羽山 清水寺（清水観音） [千葉県夷隅市]



（清水寺 四天王門）

JR 外房線沿線には、第 31 番「笠森寺」と、この第 32 番「清水寺」がある。この 2 寺と帰りの駄賃に第 29 番の千葉寺を併せた 3 寺を一日で巡った。巡った順番は遠い方から順に打ち戻ることとし、この清水観音をスタートとして、房総線に戻る順番で笠森寺に寄り、千葉駅から千葉寺を打ち上げた。

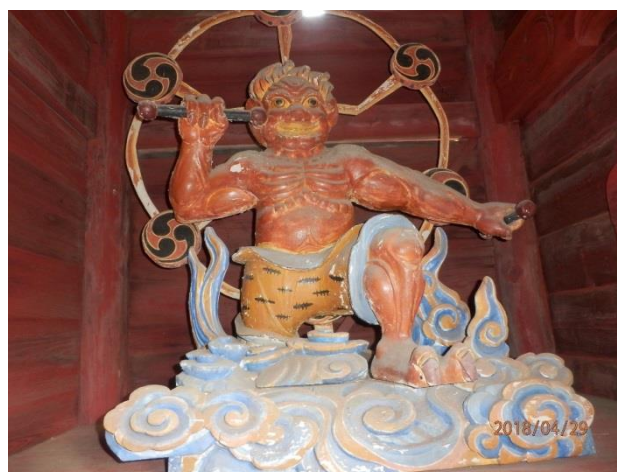
最寄駅は外房線の「長者町駅」であるが、この寺の方面へのバス便は無い。歩けば往復 3 時間なのでこの寺への往復だけで 3 時間も浪費するのは勿体ないから、往路だけは長者町駅構内営業に 1 台しかないというタクシーを使った。3000 円ナリ。

寺の周りは田圃と里山という田舎であったが、伽藍は広く、往時はなかなか栄えたであろうことを偲ばせた。車などでお詣りする人が多いのであろう、道々にはお寺への方向指示板が沢山建てられていた。この境内は近所の人憩いの場にもなっているらしくて、たまたまゴールデン・ウィークでもあった為か、小さな子供を遊ばせている若い夫婦が多かった。如何にも謹厳で格が高そうで入りにくそうな寺も、また寂れてはいるが孤高を保っている寺も、或いは観光客や祈願客で賑わっているような寺々も何となく落ち着かないものであるが、このように庶民がのんびりと寛いでいたり、また、腰を曲げて杖を突いたご近所のご老人がお詣りしているような寺は何となく親しみがあって良いものだ。

お寺と言うものは本来はこのようなものであったろう。それが、勅願だの、檀家だの、菩提寺だの、お布施だの、教義だの、開基だの、縁起だのとお寺ビジネスに走りだしたものだから、何やら葬式寺に落ちてしまったのであろう。

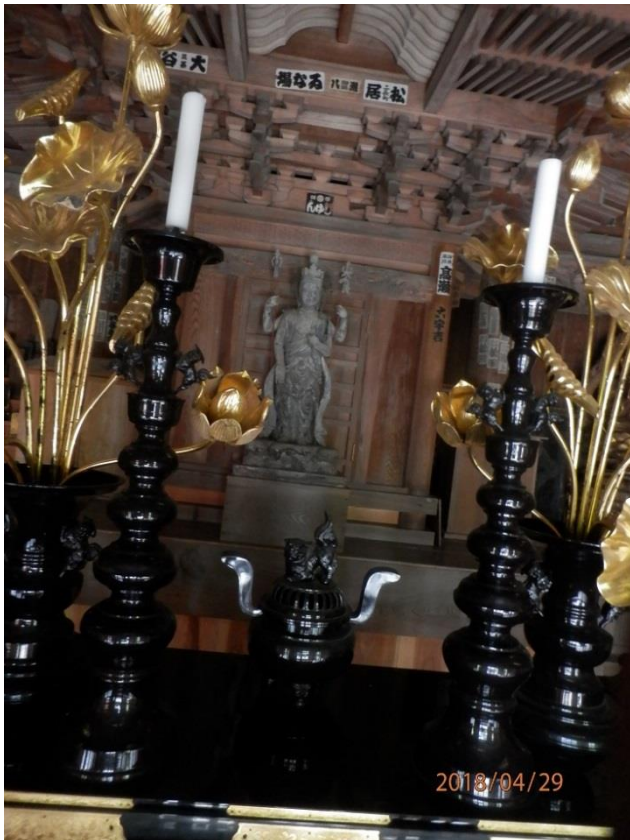
マ、それはともかく。

この寺には仁王門の奥に四天門もあって、これがなかなか立派なものだった（冒頭の写真）。四天王とは、仏教を護持するために須弥山の中腹、東西南北の四方に住む持国天、増長天、広目天、多聞天（毘沙門天）という鬼神である。この四天門にもそれらの鬼神が住んでおられ、また風神・雷神もおられた。四天王は職業柄怖い顔付きではあったが、一方でその姿はユーモラスなものでもあった。風神・雷神にはお伽噺に出てくるような愛嬌があった。虎の革の猿股を穿いておられた。



（上段：四天王、下段：風神・雷神）

御本尊は千手観世音菩薩（秘仏）。おん ばさら たらま きりく。
赤穂四十七士の供養像なるものもあった。ここでは赤穂浪士も仏サマや神サマになっているようだが、ちょっと寺の雰囲気には不似合のようだった。



(おん ばさら たまき りく、前立)



(赤穂四十七士、これは寺の雰囲気にはチョット不似合)

帰途は、田園風景の中を歩いて帰ったが、折からの猛暑、未だ4月だというのに気温 27℃の真夏日。熱中症にやられそうになったので、県道まで戻った所でタクシーを呼んで長者町の駅まで戻った。

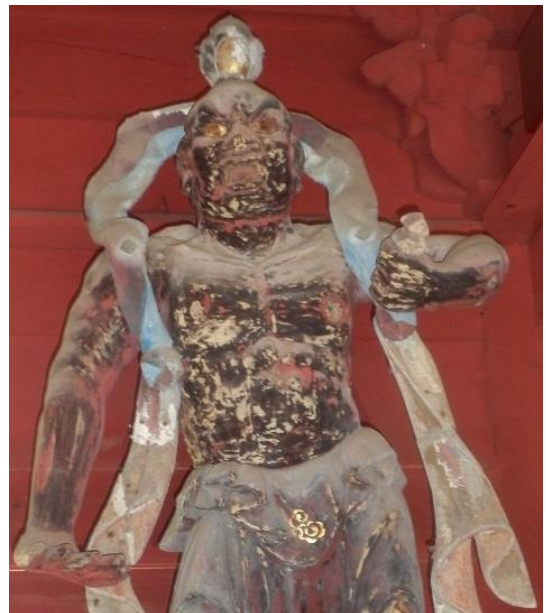


【音羽山 清水寺】天台宗 本尊：千手観世音菩薩

【御詠歌】濁るとも 千尋の底は 澄みにけり 清水寺に 結ぶ関伽桶

(参詣日 2018. 04. 29)

第三十三番 補陀洛山 千手院 那古寺（那古観音）〔千葉県館山市〕



房総半島は広い。拙宅から南房総に行くのに JR で千葉廻りでいけば相当な時間が掛かるが、三浦半島の久里浜港から東京湾フェリーで金谷港まで行けば 1/3 ほどの時間で行けるので、今回はフェリーに乗った。南房総にはこの 33 番那古寺と 30 番高蔵寺があり、1 日でこの 2 寺を廻るために東京湾フェリーで房総に入り、帰路は木更津から東京湾アクアラインの高速バスで横浜に戻るという東京湾横断のルートを試してみたが、現地での内房線や路線バスの本数が少なく、途中の待ち時間が相当に掛かった。

さて、館山にあるこの寺は、那古船形という JR 内房線の駅からトコトコと 20 分ばかり歩いた丘陵の中腹にあった。海洋性の広葉樹が晩春の陽に映える境内と由緒ありげな多宝塔、山門の古びた仁王像はそれなりによろしかった。また、境内から見える鏡ヶ浦の景色もそれなりに良かったが、納経所の寺男（住職？）は感じが悪かった。12 時前には納経所に入ったのであるが、12 時から 13 時までは昼食時間だから時間を考えよと小うるさい説教を朱印を押している間中グチグチとノタマッタ。この寺は坂東 33 観音巡礼の結願寺であるが、この寺男には結願寺の品格も大慈大悲の御心も微塵も感じられなかった。

【補陀落山 千手院 那古寺】真言宗 本尊：千手観世音菩薩

【御詠歌】補陀洛は よそにはあらじ 那古の寺 岸うつ浪を 見るにつけても （参詣日 2018/05/24）

おわりに

2017 年 11 月に第一番「杉本寺」から始めて翌年 2018 年 8 月に第二十一番「八溝山・日輪寺」で結願するまで、トロトロと足掛け約 10 ケ月間を掛けて坂東三十三観音を詣でてみたが、冒頭でも記したように何の瑞兆も御利益も顕れなかった。マ、これは「修行、功德なきところに験も無し」という事そのものであるが、昔からお伊勢参りをはじめ大凡〇〇詣や△△巡礼などと称する旅は諸国漫遊でもあったから、マ、これはこれでよしという訳であろう。各札所門前の酒亭にタップリとお布施を弾んでおいたから、その節には閻魔大王から罪一等減じて頂けるかしらん。

さて、昨年(2017 年)の夏にスイス・アルプスに登りに行った際に腰椎骨折をして以来、半年間近く寝た切り老人になり、病院に通うにもストレッチャー付介護タクシーに寝たまの姿勢でお世話になるような状態で、これからはこのままの恰好で淋しい余生を過ごす羽目になるのかと意気消沈したものであったが、年末頃から手すりに掴まって多少は歩けるようになった。それで、多少は元気が戻って来て、これも日夜拝んでいた(嘘っぱち!)神仏のお蔭であろうかと、とりあえずは一番優しそうな観音サマに御礼を申し上げる巡礼をすることとした次第である。

坂東 33 観音札所には、浅草観音や鎌倉の長谷観音など観光客で盛んに賑わっている寺院がある一方、田舎の今にも廃寺になりそうな淋しい寂寺もあった。そのような寂れた山寺の中でも、折角坂東三十三札所を仰せつかっている限りは、住職や寺男が居なくてはご朱印も授けられないので態々遠方から参拝された方々に申し訳ないと、極く僅かな巡礼者、それも月に何人も来ないであろう巡礼者のためにわざわざご朱印所を開いている奇特定の寺もあった。

そのような寺の一つが、茨城県土浦市の山中にある[第 26 番「清龍寺」](#)であった。ここは無住の貧乏寺であるから麓の住民の方々がボランティアで護寺と納経のために毎日交代で登って来て廃屋のような納経所に詰めておられたが、若い人が減って行く麓の集落では住民が老人ばかりになり、このようなお勤めをするのも大変な苦勞であるが、西国 33 札所などから廻って来られた遥か西国からの巡礼者もあるので、このような遠来の方に失礼をしてはいけなさと老軀に鞭打って毎日登って来られるそうで、誠に頭が下がる次第である。

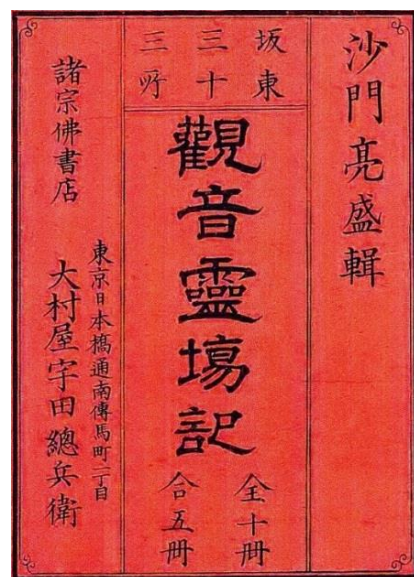
同じようなもう一つの寺は、今回の坂東 33 観音詣で私が最後の結願の寺とした茨城・栃木・福島 3 県の県境に跨る標高 1000m 程の八溝山^{やみぞ}という辺鄙な山中にある無住の[第 21 番「八溝山・日輪寺」](#)であった。この寺は、常陸大子という J R 水郡線の田舎駅からバスで久慈川・八溝川の溪谷を小 1 時間程も遡った蛇穴という山中のバス終点から更に林道や山道を徒歩で 10km 程も登った所の山中にある廃寺のような寺で、周囲 2 里には集落も民家も全く無い山中の辺地であるが、寺から管理を依頼されている麓の老人の寺男が毎日麓から寺まで通って来てお勤めをされているとのこと。冬期には積雪のために道路が不通になり寺は閉山されるという辺鄙な場所にあった。

私が詣でた日も参詣者は私一人だけだった。春秋の頃は桜や紅葉を求めてハイカーも来るには来るが、通年で見ると一人も参拝者が来ないという日が殆どだそうだ。誰も来ない山中の淋しい寺で独りで過ごすのもこれはこれで大変な苦勞であろうが、私如きには分からない深い信心があるからであろうし、また、態々山中までお参りに来た参詣者を済度するために苦勞して勤めておられるのであろう。

この寺へは、真夏の猛暑日に蛇穴からカンカン照りの林道を歩いて登って行ったが、途中でこの寺に入る山道を間違えて別の山道に入ってしまう、結局寺には行き着けずに 6 時間程山中をウロウロして登山口まで舞い戻った挙句、日を改めて再び登拝したので、特に印象が深い。

そのようなことから、冒頭に掲げた挿絵の沙門亮盛輯「坂東靈場記」の中の同寺に関する挿話の一部を紹介して本稿の終わりとしたい。この本の編著者沙門亮盛は江戸期の真言宗の名僧で生れは埼玉県三郷郡、西国の長谷寺などで長年にわたって修行し、東国に戻ってから各寺の住持を務める他、坂東の各札所を再三訪ね、その寺の縁起を書写、また土地の古老に伝説を尋ね、また古文書や典籍を縦横に駆使して書いた案内記である。ここに現代語訳で訳出した部分は辺鄙な山中のこの寺の様子が縷々書かれていて興味深い。実際に私が訪ねた山道もその記述のと通りの辺鄙な深山の山中であった。

(古文に造詣の無い私が適当に現代文に訳したもので、誤訳などのご容赦願いたい)



【坂東靈場記 卷七 △第廿一番 常陸八溝】

○鉄砲ノ音不思議之事

明和4年亥年の秋、坂東を巡礼してこの八溝山に登った時、大悲不思議の靈驗あり。旧暦の9月2日、太田原の宿を発って八溝の山嶺に攀じ登った。この間11里の間飲食できる茶屋も無く、道の半ばに至る頃より甚だ空腹を覚えた。この時、川が増水するほど大雨が降り、日は既に西に没した。この辺りは春夏に巡礼者が通るだけで、普通は往来も無いので熊笹が生い茂っていて道も分からない。風も激しく吹き荒び、雨にも濡れて寒さも耐え難くなってきた。

仕方なく山中に立ち止まってひたすら大悲経を念じた時、山に響く鉄砲の音がした。拙僧はこれを聞いて、近くに人里があるのか、或いは狩人がいるのかと大いに喜んだ。その音がした方向に向かったら、また間近に鉄砲の音が聞こえた。このことに励まされて、急いで18、9町ほど行くと御堂があった。そこで宿を乞うて櫓火にあたりようやく人心地が戻ったところで堂主と対話して、実は今宵は風雨に打たれるところであったが鉄砲の音を頼りに訪ねて来た旨を語ったところ、堂主は眉を顰めてこれを訝った。堂主が語るところによれば、この嶺にはこの御堂の他には人家もなく、また殺生禁断の地であるから鉄砲の音がする筈もない。これは世の苦を救い給う大悲依怙の方便であろうと堂主は感涙に咽んだ。拙僧も身の毛立ちするほど有り難い気がして、堂主と二人して夜もすがら普門品を読誦して大悲の本誓を謝し奉ったのであった。

(本稿 完)